

「働く少年少女の声」と
「年少労働者保護対策の実例」送集

労働省婦人少年局

目次

第一部

寮と勉強	(女) 植紡糸工	十六才	四
私の就職	(男) 殊工所見習工	十六才	七
女工の改善	(女) 織物工	十七才	八
自分はいくら考えどう実行した	(男) 製陶工	十八才	一
工場に於ける村人間係について	(男) 養成工	十六才	一三
工場と学校について	(男) 養成工	十六才	一五
会社はもっと視野をひろく	(男) 養成工	十五才	一七
新聞配達の苦心	(男) 新聞配達員	十四才	一八
その職場をやめたわけ	(男) 正時制高校二年生	十六才	二〇
希望をみつける	(男) 正時制高校二年生	十六才	二一
夜学生の希望	(女) 織物工	十六才	二二
ら音が可愛想だ	(男) 養成工	十六才	二三
私の声	(男) 聴写印刷工	十七才	二九
私の生活設計	(男) 養成工	十六才	三一
幸福な生活の礎をつくらう	(男) 養成工	十七才	三三
父の地下定寝によせて	(女) 紡績工	十八才	三六
小さな願い	(女) 事務員	十七才	三九

学校の先生へお願い

(男)養成工

十五才 四一

ほくのくかう

(男)養成工

十六才 四三

職場のおとこ

(男)印刷工

年令不明 四四

女中も一個の人間

(女)女中

十七才 四五

私の一日の生活

(男)印刷工

高校三年生 四七

働きながら学ぶ辛い

(女)服装

十八才 四九

職場に対する私の考え

(女)事務員

十八才 五一

昼休みの過ごし方について

(男)荷運工

十七才 五二

職場生活二年間

(男)電話局勤務

十七才 五四

私はこうしてミシンを買った

(女)紡績工

十七才 五六

一通信生の希望

(女)事務員

十六才 五八

勉強するわけ

(男)木工

十七才 五九

健康が才一

(男)養成工

十六才 六二

働きつつ

(女)紡織工

十七才 六四

私の希望

(女)理容師

十七才 六七

向進つた就労才一歩

(女)紡績工

十六才 六八

ある夜学生の叫び

(女)店員

十八才 七一

大望

(女)試験工

十六才 七二

日記

(女)紡織工

十六才 七五

指して立つ

(男)桶工

十七才 七八

昼休みと自由

(男)現四工

十六才 八〇

第二部

通商制高校に在學する年少労働者の保護対策……………高等学校放談……………桐川 秀和……………八〇

年少労働者の訓練の実情……………技能者養成所主事……………井上 徹……………八九

中小企業と年少労働者の保護対策……………会社総務……………岡 根 国 二……………六一

は し が き

労働省婦人少年局は昭和二十八年七月に、これからの目的をもつて、二重の募集を行いました。その一つは才一部の働く少年少女の声を、他は才一部の年少労働者の保護対策の策定であります。

「声」の募集課題は、(1) 働く日君において、周囲のものに、また社会に對し、何ぞ希望するか、(2) その希望を実現させるために、どのように実行したか、とありました。五百数十篇の応募文の中から、まず百篇が選ばれました。その全部を紹介することは都合上できませんので、内容が多種多様にあつたより留意の上、ここに三十八篇を取ります。募集にあたり、明快な筆致でつくしめるもの、冗長なものなど、表現に巧拙はあつてゐる、一つとして感嘆をいふのはありませんでした。

もともと「声」は、訴えたいことのあつた働く少年少女に、訴える機会を与えたものでありますから、概して内容の面白いものが多いことはやむを得ないでしょう。雇主や職場のおとち、そして学校の先生などが殆どに上つています。労働基準違反や職場の不快な空気、そして先生の差別的態度など、それが苦痛の種にはどのようなものがあるかはどの程度のものであるかとも、現実とこれからの少年少女が感じみや苦しみを感ぜてそれを書き記したのであります。

切々の進学希望を記したものが訴えております。勤さながら学ぶ機会を得たものは、労働と勉強との二重の役割に加えて、雇主と働く仲間への気がねを述べています。しかも、それをさへ羨ましがらる、苦学の機会を得られない少年少女のあることを感ぜて知ります。進学希望に欠いて自立つものに、おとなの労働者への批判がめります。

不親切、冷淡、斜視手なおと存連。

身内いね話をする、技術と教えることを惜しむ先輩達。

「それさへ受けければ職場は楽しいのだが——」友達にまだめられてきたが、いかに返答したし——「就取
早やどなられ通して、何取れ出るとは足がすくむ思い——などがあり、働くものが働くものを苦しめてい
る例として反省させられます。

労働時間、休日、賃金支払、その他に関する違反について雇主の反省を望むとともに職場における人
対人の感情の摩擦、それはささいなものであるかも知れませんが人間を働かせる以上、この問題が真剣
にとりあげられることを望みます。

心の不満が労働能率を低下させ、失禮の原因ともなることを考えますと、労働条件を低下させること
が必ずしも企業に利益しないことや、むしろ是をない職場のふんいきを大いに関係があらうことに注意した
いものさす。

年少労働者の保護は企業規模の大小や、人の立場の相違などにかかわらず、何程かはさるものさあ
ります。

才二部に取りめられた三篇は全慈愛する立場の人々により、異る面から書かれたものでありますが、年少
者の保護育成に、真剣に取組んでいく点では、いずれも劣らないものと思えます。

この収録本、これから社会に出ようとする方や、現在勤めておられる方、雇用主、学校の先生、父兄
として世の一般の方々の何かの御参考になれば幸いです。

労働省 第 八 少 年 局 長

藤 田 太 吉

昭和二十九年三月

米

一

部

寮と勉強

(女) 焼 房 系 工 十 六 又

「制服、制帽」——働く私達にとつてどんなに美ましく、小つ如ましく思ふ言葉でしょう。中学を卒業して間もない頃は、制服の友達を通ると、そつと地かげにかくれたり、電車の中をバツジを見つめ、自分の所いような、いかにも女工とわかる身なりを、どうしようもない強欲しく着たものをしてた。

働いて学べる定時刻はあるとはいへ、二文替る仕事をする紡績女工は、夜間部すら入学できません。とはいへ、八時間働いて、後は食べたり、寝たり、まるきや箱のような生活でいようとはい思いません。いくら女工でも、高校程度の学力はあつてゐる。座敷敷があつたらそれだけ教養を高め、高技に行つた友達にひけ目を感ぜない程度の学力がほしいと思ひました。映画やクリムもよい、飲み食いするものも人生の修養だと思へばそれさういふのもいいかもしれません。しかし、教養を科につけることは、それにくらべてはるかに良いことだと私は思ひます。雑誌で「中学校時代はすでに過ぎ、今や高校時代来る。高技だけはどうしても出なければいけない」というようなことを読みました。私はほんとにそうだと思ひ、働いて定時刻にも行けない私達にとつて福音の通信教育に目を付けました。通信教育こそどなた所をも学べる最良の教育法です。

新聞の広告や雑誌を眺めると、固う通信教育をとびました。「概年一年！ 一か月二百円」等と書いてあるのを見ると、心はおどろ、もう全日制の学校寮内を見ているような気持ちで読んだものです。そして、東京の某通信教育寮内書を買求しました。それから、仕事が終わつての暇には、郵便屋を一枚にのぞきました。到着までの一通問がどんなに待ち遠しかつたでしょう。今日こそはとのぞいた一通問目に私の手に入つた寮内書。開けてみると、先ばいの希望に漸ちだ便りがたくさんつていました。私はどんなに勇気づけられたことをしよう。

早速入学願書を作成、十日目に教科書を渡りどつて、私は通信教育ではあるが、東京の高校校外生として入学できたのです。毎日学校へ通わなくともスタディガイドは立教社大学の先生方の講義を一遍いさす。先生の目の可る勉強するような楽しい気分でした。又厚い本をかかえて心の中はおどつていました。赤い小さなバッジは私の服に輝き、来るべき春にさそえて、美しく私の身を守つてくれるかのようです。

私はそれまで寒戦夢中、ただこれから勉強できると思えば、何もかも忘れていました。しかし、本が着いてやつと心が落ちつく。……さてどうして勉強するか、置く暇から置れた際、暮す私、静かな部屋がほしいと思つてみた所、どうにもなりません。三階の図書室だつて、冬は寒い、夏は埃が来る。部屋は十二畳半に七人、とうとうい何まで溢れん。それに、働いて勉強しようとする私達をあどわらう人々があります。本を内くと皮肉を言つたり、消費時間になれば、男さずにいると人にめいわくがかかる。一生懸命勉強しようと思つて心にあつたのも、わずか一週間程で消えさうになりました。

働いて帰つて来ると山のように荒れ、友達と話もしなければ仲間はずれになる。一日に一時回本を閉ければ良い方、一ページも読まぬ日の方が多いのです。春が来れば野山にも行きたい。夏は海へも行きたい。……あつて最初から私の希望はみだらな、なまけ心に追いやられてしまつたのです。

(5)
しかし、……その時、私をほげましてくれたものは、……毎月本と一語に入つてくる新聞、そこには希望に胸みくらませるわが道を歩んでいる同僚、働く全員の友の声をした。『独学生』の諸君、しばし享樂におどえて……私はほんとうに自分の進路の道にあおられました。さうだ、今へこたれてはいけません。致にくわねども、食口をただかれども、やり通さうと考えました。『独学生』は牛の如く、一歩一歩歩むのさす。先生方の魂のこもつた言葉を聴いて、まだ私は若い、樹十年かかつてもやり始めると心にいかいしました。一心にやればむずかしい数字も面白くなり、A B C しか読めなかつた英語がおどる程上巻、私は独学の道に入つてまだわずか十か月です。なびちつと早くやらなかつたかと今さらの如くおも

(6) のしく思います。たゞた半年程の悠長期におちいった私、しかしそれは全国の働く人々によつて改められたのです。

通信教育を受けるようになった、全国にペンフレンドができました。その人々のうれいお便りを読むたび、又新しい教科書を受け取るたびに学ぶ喜びを感ずるのです。たとえ、普通の高校生をいにする、私は立派な高校生だと思つてゐます。つまり働きながら学ぶほこりを持つてゐるのです。通信教育だから普通の高校生より弱と考へることは、間違つてゐると思ひます。むしろその人達よりえらいのです。八時間以上働いた後でまた勉強をするのですから。通信教育をも國家の試験を受ければ立派に、高校卒の資格が与えられるのです。拙著を立派に世に出て活躍してゐる人達がたくさんいます。私達はその人達が持つた道を歩んでゐるのです。その道に、一つさむ汚点を付けてはならぬのです。春が行き、木の葉が落ちても私の目的は変わりません。働きながら人間完成の道を歩むとるのです。

私は今高校と英語の通信教育を受けています。英語の中学卒業証書を受け取つた時の感激、喜びは一主怒れることのできない事柄として、私の心に残つてゐることとせしより。拙学の道に入つてまだ日の浅い私、めどす山の頂上はまだまだ遠く、その道はけわしい。しかしへこたれるは存らぬのです。私は中学卒業証書と働く斜になつて最初に、一生資金をも教授を身につけ、學問の探究はあくまでやりぬこうと考へました。今、私はその序の口を歩行してゐるのです。たとえ後になつてそれが報いられなくとも、勉強によつて人生の楽しみを味えるだけ幸福だと思ひます。まだまだすることは沢山あります。歳年過ぎても、最初の信念に打ちむかつて行くことと思ひます。今日又私はその信念にむかつて、ひたすらけわしい道を登つて行くのです。世界中の働く友と同じように。

私の就職

(男) 鉄 工 所 更 替 工 十 大 又

「とかくこの世はふねくれたものだ」私が就職する時に、最初に通じた気持である。私の家は親子八人と云う大家族で、家計は父の収入と、母が二飯ばかりの田畑を耕しているばかりは全無収入の道がなく、生活はけつして楽さなかつた。卒業の際、私が大会社に就職を願つたのも無理からん事である。私はその時はなるべく果外に行きたかつたので、果外求人をもとめるとはほとんど懸念した。だがそれ等は皆むだであつた。いど願書提出という時になつて世話をしてくれていた先生に問われた。「君は長男じゃなかつたか。」「はい、そうです」先生はしばらく考えていたが、「それは無理だね。」「どうしてですか先生」私は勢い込んでたずね返した。先生はしばらくためらつていたが、「果外ではやはり長男を嫌います。それは今までに果外に行つた君のよう若先輩が終つてしんぼうがたりなかつたのだ。理由は色々あるが、このようないなかでは、長男の懸賞相手が重税されているのさ、自然ある時期が来ると呼び寄せられる、そんな事が笑して、君のよう若輩もそのをばすえを食つたのだよ。」今にもめさめめとくれといわんばかりの先生の声だ。私は卒業もからだの方むけつて人にひけはとれない自信があつた。その時のくやしさを……私はあらゆる人をろんだ。若い希望も、たまたまつけられた疳のようになつた。私はすべてめさめめと思つた。「すべて相余だ」といふとそんな声が出る。私はこの宿命と云ふ言葉が何んだか恐ろしくなつてくる。私の歩む道などには大さくなろうと小さくなろうとやはり一本の道である。私は今度に行く大と道道を志すにしている。その道は幸福であると私は思つてゐる。その道は容易に求められたるには長男といふ大きな石があつたのだ。この大石をどかさなければならぬが、悲しくそれは私が一生かかつてもとかないであろう。誰かうらんでも、誰にその恩をぶちまけてさ

(8) それに、たずねに神聖を毀れさすだけだと思つた。結局私は、廣町の数工所に行く事にした。それは、一年二か月の月給が罷れた。いよいよ数工所へ行く事になった。結局工

とほ名附だける。給料を減らす一つの手段にすぎない。日給六十円を三年間に百五十円までとの最初の契約であるが、今だに七十円より上すべくれない。まずオ一に給付に家庭のなごりがある。

江戸時代の封建制度の生んだ、徒弟制度のなごりであり、道徳的習慣である。是習工という一個の人間を、あつても、年明の多い頃に地位が著低する。だから勿論組合など作れるわけがない。工員の中には、賃金が安いと云う人があつて、それは賤だけさ、決して面と向かつては云えないのである。金持の者であるにもかかわらず、才一の理由が、好むマイナスになるからだ。好む時間も決して定めない。忙しい時は、才一の理由で、いゝに延されども私運には文句が云えないのである。このようなる人種の起死、基準法の不徹底等すべて私だけの事だろうか。いなかと云う理由によつてそんな事がされるのだから、我々は法の上るは平等である。たとえどんなへんびがないなかさむ、法は法として徹底してもらいたいものがある。私は仕事が終わつてからの三時間ばかりを定時刻高枚に通つてゐる。その事は使用君にも話してゐるが、忙しい時など、もう帰るのかと幾度問われたかもしれぬ。それは剣をふくんだ、あつてたように云い方である。使用君に対してあらゆる方面に理解あることを願う。

女工の教養

(廿) 織布工十七天

八時のサイレンが鳴ると二端は一斉に活動しはじめた。そして私の一口水が始まる。私は今年の四月からこの工場の準備工として働いてゐる。兎まつなご屋がらふつと「今糸をつむいでゐるのが私なんだ」と思ふ。去年の三月中旬から牛兼する時、いやごとしのお正月まる私には私が女工と名を想像するつ

とがきまわつた。中學校からみんなが進学する時私の父母に頼んでみた。が、結局だめだつた。家には女ばかり子供が六人あるんだもの、養育するだけさ精一ぱいなのだ。それで私はお義理を習いに行くことにした。ところが卒業までねに居つて母が無理をしてさるといつて高校の分校へ上がらせられた。そこは定時刻で家庭科だつたが私にはこの徹底しない学校が性に合わなかつた。それより私には私が學校へ上つてゐるためにすぐ下の妹が學校へ上れないのさびしかうかといふ心配があつた。二人ともあやふやな教育を受けて結局おぼろけとらずに終つてしまふのさびしいだらうか。それなら私がやめて内けは妹をちゃんとした學校へ入れられる。そして私は夜学へ行かう。そう思つた私は學校をやめてしまつた。そしてどん詰まりさうとなく内けがなればと思ひ今の工場に入つた。生れど始めのおとぼけの中に生まれ、いやなことや苦しこといろいろあつた。さう私には夜学へ通ふといふ唯一の光がある。駅から家まで二つ分、私は人通りのない道を暗い道で通ふ。女が夜一人あるさしてはいけな。こんなことばは耳にたこがささる程聞かされてゐるのだ。二つ分開始あたりには氣を配り私はさんちぶろしつだけ家へ行くのだ。それなのにさうとは何となくいことをするのだらう。私があるいゝといふとねえちやん、自転車にのせてつたけようかしとひやかしたり、私が道のすつと右のはしをあるいてゐるのに、わざわざ私の前へ自転車に向けて「おやすみ」といつてみたり、グッシーを止まらせようねえちやんとついくのしと声をかけたり……。さういふことをしてゐるおとなはほんの死骸にすぎないのかもしれない。けれどもあつたためにさうされた方がどんなに大きな影響を受けるか、考えたことがないのだらうか。若い女の子が夜一人あるささないのは、大抵や梅がこわいからさうだ。さうしたふどけた男の人がこわいのだ。人間が人間を恐れる。恥かしいことだ。そしていくらかも防げることだ。おとながさうした死骸をえしなさいくれたら、女の子はさうと多く夜学へ通えるかもしれない。そして昔から教養の低いものとされている女工も、もつと教養の身についた人がふえるだらう。まだが死ねればよい、糸をつなげとえすればよいといふのが今までの女工だつた。けれども今はさういふことはまにあわな

い世の中になつてゐる。私たちがばやばやしていると、又皆の女工救済が始まらないとは限らない。私たち女工はもつと救済を身につけ、正しく判断のできる思考力を與へなければならぬ。それには夜學へ通うのが一番手取り早い方法だと思ふ。それなのに「女の一人あるまじはあぶないから」といつて通學する人はほとんどいない。現状では夜學へ通わなくては勉強できないのだ、それで結局大部分の人は救済の與わらない女工で終つてしまふことになる。糸をつなぎながら私はこんなことを考へる。女工はもつと救済を身につけねばならぬ。いつまでも馬鹿にされる女工ではいけない。

社会は女工の救済の施設をもつと考へてほしい。そして今あるたつた一つの施設である夜學へ通うのをばやばいでもらいたい。そうすることによつて私たち女工も學校を出た人と頭を並べて、人生をあかすようにならねばならぬ。

自分はこう考へて、こう実行した

(男) 製 陶 工 十 八 文

社会に出てから二年目、ぼくは、社会の規則はだいたいぶられて来た。中学の三年の時だった。二学期から三学期にかけて、いつも先生がぼく達に、教えて下さった事は、「君達は進學組と違つて、商業組だ卒業すれば、すぐ社会に出て働くんだ。今までの様な學校生活と違つて、なまやかしいものではない。自分の考へた社会に出て、大家の考へたに違ふ。持つて、おこつてはいけない。我まんするんだ」といつも注意された。三年生になる時、希望學校に分けられる。大半は商業でなく進學組だった。ぼくも進學組から商業組はないと思つたが、ここで一つ、社会に出て、早く仕事がしたいという考へが、わいてきた。ぼくには一つの希望がある。社会に出ては派なジエントルマンになるんだ。ぼくはもう一心に、社会に憧れた。だからぼくは、社会を甘く見ていたに違ひない。実際にもまた、至親が無いからだ。工場で朝、首に会つた時、一ことも口がきけず、学友と違つて冷い目で見られ、學校時代のことが悪い出され、悲しくなつた。仕事は、はかどらない。あせる、暗は、ずんずんと方い越して行く。失敗して注意され、初日は、惨々だった。そして心には、注意された人が、憎くて仕方がない。次の日も少しの事で、あみが又と注意された。くやしい夾に腹が立つ。「どうしてこんな少しの事におこるのだらう。また入つて間が無いんだ。こんな事なら、他の工場へ行つてしまおう」と毎日のように思つていた。しかし、ここでぼくが悪い直した事によつて今のぼくに依り上げたのだ。注意されるのは自分がいけないんだ。反抗心や、口を之する事は無い。注意される事は僕に教えて下さるのだ。

社会は、甘い天国では無い。ぼくのように基本から依り上げられてゆく他の少年達でも、悲しい思いは一度や二度で無い。ぼくの働いている工場は陶器の製造所で、すぐ橋の端が、學校へ通う道である。百

(12) 人の仕事は、はこりが出で、服を賣る賣りにあつてしまふ。朝、學生が通ると、仕事を投げ出して、かくれてしまふし、先生が通るならば、もう賣場になつてしまふ。仕事の方を逃けりやれない。そこで又、ばくは考へた。どんな新しい仕事をあたえ、会社員でも、銀行員でも正當な仕事をありとえすれば、何が恥かしいんだ、と思ひなおし、その後は、平氣な仕事ができるようになるにまつた。

二年間の三分の二は、本当に苦しい工場生活であつた。稍息するのがつかなく、社会の感しをなくすべく味つた。真夏になると、太陽の光線を裏下に受け汗がとめどなく流れ出てくる時をも、ふと、急に左にか明るい気持になる時がある。どのような、苦難を耐え、心から、晴れてくる瞬間があるものなのだらう。

人生をみて、今日の生活が、榮しければ、何より幸福だ、と思ひ、その様に毎日の気分を氣榮にしていかに仕事をすまふようになるつた。學校生活と、工場やその他、社会生活との違いを次の人達に聞つてもらいたい。

ただ一つ笑つてゐたのは夜學である。昼間の裏れて、十時頃までは、どうしても起きをいられない他の、人達は、昼間の仕事にも負けず、通つておられるのは本当に働く人達最高の努力だ。僕は尊敬している。だから僕の榮しめは新聞だ。新聞こそ僕等の教科書である。けつこく世界の事がよく解り、社会科のよい参考になると思ふ。独立日本の前途において、よく進歩を立派な行いをしていってこそ世界と手を一層強く握ることができるのだ。その日本は僕達の責任だ。と新聞を見るたび思ふ。今の僕は二年前とは本当に變つてしまつた。工場でも認められ、仕事の地位も昇格し、新しい希望に燃え一腔に傾いてゐる。それは兩生態これがみかみといわれた人達のおかげだと今では感激を返し、次の注意を續つてゐる位である。今の僕はどこまで社会のきびしさをまたえしの心を求たのである。一日中の工場生活を自分の或い考えを不愉快に過ぎぬ様に、いつも氣を付けてゐる。神聖を供ひ過ぎるは能率を低下させる。僕達が立派に働いてこそ、安定した環境だ。

工場に於ける対人關係について

(男) 養 成 工 十 六 才

私は始めて入所した時、

と云う算術を或る人から教わった。

私はのと彼は当り前のこ

となつて、何とも思わなかつたのです。このことが白黒で地面に書かれた時、私は何んのことだかさっぱり

わからず、地面にとらめてをした形をした。③は前の②の何れが關係がありそうだと思えたが、又そ

うではないように感じた。私はそればかりにも謎めいてゐるのかわからず、遂にその人に聞いた。そ

の人は「君達はまだ入所したばかりだから、何も知らないだろうが、これが今の職場に於ける解き難い算

術なんだよ」と前置きしてから説明してくれた。「君達は②のはわかるが③の

、当然

並用しない。もう論算術の上ではない。君達は今にわかるだろうが、もうじき仕事が無之られる。その

仕事の急所を諸君が教えてくれるだろう。しかし諸君が教えてくれる仕事の急所は、必ずしも正しいとはい

えない。君はそれに対して一つの意見を持つ。今では「エ」として考へる。君はすぐ班長の前へ

とてを出してはいけない。君達は名目上求給取工なのだから必ず班長のいう通りに仕事を進め、もしそ

れが失敗に終つた場合には班長の教へ方のミスであるから、責任は班長にとらせる。その後で君の「エ

」をこれはどうでしょうかと提案する。もし土事をやる前にこれを提案したならば、班長は「あいつは生

意気だ。すぐ口舌をさせる」といふまに將來ある君達にとつて大変不幸である」と結んだ。私はその時

何も知らなかつたので、たゞその人の雄弁さにひきつけられた。たゞばうぜんと聞いていただけであつた。

そのうち、月日がたつうちに、その人が死つたことに對して疑問を持つようになった。

(13) 亦(一)に、自分の意見「エ」をすぐ出さないで、もし班長のいうことば、まさしくないと、自分でも解

っているのに、意見を述べないのは、互に切さなくばして、己をみがこうとする人に対しては望みの外り、それよりもまず自己取柄をはなれたいと思つた。

オ(二)に現在一部の職業の人達は、階級意識のものが多く強い封建性の持主であると思つた。古い道徳のものならは良いのだが、職場内のそれは良いどころか悪いものはなほだしいと思つた。また技術の進歩をせまらざる。これは敗戦の苦杯をなめた我が国が独立して世界の仲間入りをし、大いに発展しようとする精神に反する。また仕事で失敗したのを班長の教え方うミスだとして、責任を班長に買わせるのは大に無責任な行爲である。

私はオ(一)とオ(二)が相反しているのを知つた。オ(一)をやばるうとすれば、必ずオ(二)の手續がじやまをする。そこで私は次の様なことを考へて実行している。これは当り前のことであるが、當件處置、その場その處に依じて用いている。

の仕事の品物をもらつて説明を聞いてから、わからない所、あるいは、こゝをこつた方がいふんぢやないかと思つた箇所があつたら何べんでも聞き返すことにした。何べんでも腹肉することによつて遂には班長も改善すべきところを目をつける。これも感情なども取さずに素早く仕事をやっている。

のいつも悪い癖ばかりして仕事をし、休み時間でもあつたりしていたのでは、自然善と調和がとれなくなり、ついにはつまらないことにも班長にしかられる例が案外多い。私は努めて職場の人達と話し合ひ親しくなるつと努力して来た。……時に職場内同りようと寸暇をさいて話し合つた。そして今では誰とでも親しく話し合へる様になり、仕事の事でも円満に解決して、前述の(一)と(二)の矛盾等全く考へようとしても考へられなくなつてしまつた。時々大きな声で勞鳴りつけられることもあつたが、私はその時のことをよく考へて見たら皆自分の態度であつたことがわかつた。だからすぐに素早く仕事をすることができた。

の何へんでも良くわかるまで質問した。

②常にほがらかにした。

③自分の行動に対して反省をした。

以上のように私は②③を常に心掛け、時には職場の人の意見を参考として聞いた。

私はこれらの事柄を基礎として卒業し、毎日を楽しく仕事をしながら現在にいたっている。

職場と学校について

男 養 求 工 一 十 六 才

私は中学校を終り、現在の職についた時、初めに遇った事は、職場と学校を如何に両立させたら良いかと云う事であった。この困難な問題に対して、如何に解決したらよいか、良い考えは、なかなか思いつかず、学校を止め様と何回考えたか、わからないうちに、職場の方は養求工として入ったので、一週間のうち、三日間はどの平日が仕事の関連学科を習うので少なくとも二科目は宿題がある。学校の方もだいたいの同じぐらいはある。宿題より一番心配なのは、からだである。会社は八時までに出勤しなければならないので、家を出るのは、六時四十五分頃である。会社に着くと七時半、これから八時までの時間は、昼休と共に、楽しい時間である。主として、バレー・ボール、卓球、や勉強をする。八時になり仕事に取りかゝる。僕の仕事は、時計の歯車の歯を研削する機械である。材料の平行度の精度を出すためにキサゲ作業をする。キサゲを始めてやる人だったから一時間も懸命にやったら、バテるだらう。平行度がすぐ出る時は、二時間もやれば出るが、出ない時は、二日ぐらい、かゝる。

一日の仕事を終り、手と顔を洗って、急いで、学校へ行く。学校につくと、腹がへり、何か食べないと授業も受けられない程の事もあった。食堂でパンか、うどんを食べる。学校につき、授業が始める上、

取戻の暇れも、すっかり忘れてしまう。この繁しめこと、夜學生にしか、味えないだろう。学校を終り、電車に四十分位い来り、家に着くが、電車の中では、本を読んだりする。家につき、即座に食へ、すぐ寝てしまう。寝るのは早くとも、十時半であるから、六時に起きるには、すぐ寝なければ、睡眠不足になる。であるから、子爵も後習もしないうちに、寝てしまうのである。この時間については、所をた方がよいと題つた。

会社及び 学校での学料は、その時間に完全に消化することは不可能である。官題もあることだし、どうすると次の時間に大変替くので、学校から帰って来てから、一時間位は、やるようにしようかと考えたが、どうすると睡眠時間は、時間か七時間になるので、会社の仕事に、大変さしつかえるし、からだにも大変悪い。そこで私は、解決策として、学校から 帰って、御飯を食べたら、すぐ寝ることにした。又その時間になくてもは、ならない事は、日曜日にすることにした。次に私の、土曜、日曜日の生活の一だを記そう。土曜日は何と云つても、一週間のうち、一番楽しい、会社の仕事は、面談に終り、学校につくと、四時四十五分頃なので、それから、授業が、始るまで、友達と共に、日光の下で十分に楽しむ。この時間こそ、昼休みと共に、日光を十分浴びる。授業も終り、友達と、体育館でバスケットをやる。クラブに入つて、クラブ活動をするほどの時間もないし、体が疲れないので、疲れた同僚で遊ぶのである。この時間こそ、我々若く者の最も楽しい時間である。バスケットも終り、暑い汗をふき、さつぱりした気分は何とも云えない。家につくと十一時近くである。御飯を食へて、寝てしまふのがおしいくらいだ。あくる日は七時頃、起きる。九時頃より会社と学校の宿題を始める。一科目少なくとも二時間はかゝるので、少ない時でも、昼までにかゝる。七科目もあつた時などは、その日、一日かゝつたこともあつた。映画に行く時は全くない。私は映画は好きではないから、良いが、好きでない。たうつらいだろう。こゝで考えることは勉強も、大変大切であるが、身体ごと、若く者の資本ではないが、僕は入社してから、一年三ヶ月になるが、まだ一度も病気をしたり、休んだことがないのは、何よ

りも幸である。やがて、夕方になり、風呂に入つて飯を食べ、ラヂオを聞き、できるだけ、早く寝る事にさめてゐる。睡眠こそ、からだに一番良い。少しでも、体の疲労をなくして明日の仕事に全力を集中できる様にしたのである。

――終――

△△社はもっと視野をひろく

（男）養 成 工 十 五 才

私の入つた技術者養成所は、非常に良い事ばかりであつた。我々の入つた時には、すでに一期生の卒業生となる物が出来た。我々養成工の間の競合が計られていた。しかも我々の将来は会社によって保障されている。それは我々にとつては非常に心強い事であつた。しかし唯一つ私の不満とする所はよく「夜学は行かなくてもよい」「やめた方が良いんじゃないか」という事を、直接、面談に云われることである。会社側としては「養成所に入つていれば、将来会社の幹部になれるのだから、無理して夜学へ行かなくてもよい」と云つてゐるのであるが、我々が学校へ行つてゐるのは、より良い社会人となるために行つてゐるのであり、何も学校を卒業したら他の会社へ行つてしまふ、というわけでもないのである。仮りにそんな人間が居たとしても、高校卒で現在よりもよい所に就職できるわけでもないのである。そして又大学を出てから他の会社へ行くとすると、前と同様である。但し、もしも、自分の究極の目的を達成する為の手段として現在行つてゐる面談しているとすれば、それは又別に若えぬばならぬ事である。が、しかし、この様に考へて行くと、会社側が云う、夜学は行かない方がよいと云ふ事は解せない事である。あしろ、会社側では、若んで夜学へ行つてゐる者を保護してやつてもよいのではなからうか

私は思う。その様にするに於て、終局的には会社の福に役立つのでもないかと思う。即ち私の会社ではそれだけ他の会社よりすぐれた社員を持つ事になるのであると思う。もちろんこれは夜學に行きたくないとか、体が弱くて夜學に行くのが無理な人等は別問題としてである。

この問題は私の会社のみならず社員採用の廠と學に行かない事等を条件とする会社のある今日の社会に於て、その時だけの事を考えずに、將來の自分の会社、大きく云えば工業国日本の建設に當つての問題を考へるにもうすこし視野を広くもつてもらいたいと思ふ。もしもそう考へるとすれば、前記の自分の目的を達成するために何いて學んでゐる人が一人や二人君ようと大した問題ではなくなるのでもないかと私は思う。

新聞配達の苦心

(男)新聞配達員 十田才

私は今年の一月からある新聞販賣所で働きはじめました。店の主人と多くの店員を前に一回一答しました。店員には私の友達が多かつたのであまりとがらずはつきり向應に答へられ、次の日から配達に過ぎました。当店は十三區あり二十七人、中学及び高校生、大学生がはたらいております。私はもちろん何もわからずみぎのすることを見て少しづつおぼえました。私は夕刊をしなさいと云われましたが初めの二、三日間は非常にくだびれ疲勞も日々にまして一時的にになりましたがこんなことでは……と思ひ続けました。そして二週間たつとほんとに疲勞もなくなり大丈夫になりました。さて在園の人達は、新聞配達簡単なものはないと思つてゐるでしょうが配達の中にも非常に細かく神経を使わなければ荒着には書ばれないのです。今日のぞの中では新聞の良し悪しはオニとしまらずオーは配達人の心がけが荒着を

著こばせたり又おこらせたりするのであるかと私は考へ、雨の日は天気の良い日以上の気なくばりていぬいに配達しました。その結果はすぐにはぬとめられませんが一月二月とたつにつれ、読者に知れて、完全に新聞をやめなくなり、読者の件数は増加する一方でした。そして入った直前は八十大軒でしたが今日では実に百二十前後に上り店の主人も非常によろこび私をほめて下さいました。けれどこんな良い時ばかりでなく、雨には二、三軒ふいに止になり、責任感がないと主人におこられる時もありました。配達はどこまでも正しい交際です。いくら自分に面白くない時でも編はほづからしていいいと読者が不愉快であり私としてもまず責任の一つを欠いたわけだと思ひます。四月月はたらいで私自身多くの筆原をしてきました。四月に入り学校の授業がいそがしくなり配達におくれればし主人にしかれまふた。そして自分で急務を知り配達をよしました。私は大要主人に申し分けないと思ひかつ残念でした。これが今日の社会の状態で自分に都合の良い時はいいと考へ、しかたなくしりてきました。主へもどつしてもやめさせる気もなく私に集金と拡張をさせてくださいました。そして今日はお集金と拡張をします。成績は当店の首位をあらわしています。私の所をA君が受持ちました。A君は今日も一生懸命はたらいしています。

さて、A君にこんなことがありました。

やつと晴雨と夜を知り兼ねた日の一日を元氣よく店とび出しました。主人は大丈夫かなと少し心配しました。がそのまゝにしておき、私にA君が歸へるまでまつているようにいゝました。晴雨も刻々と過ぎ十二区間の人達は全部歸りました。A君だけなく、歸りません。不思議に思ひ電燈を手にもちこがしたいきました。やつと歸つた時A君はまだ五部の新聞を持ち店を出た時とまるを逆にとほうにくれていました。私が未だ事を知ったA君は家が五軒わからなと一言下をいいてしまいました。私はA君の責任感と非常に之らいと恨め二人で五軒を見つて出し店へ歸つた時は夜の八時半頃でした。次の日からA君はまちがへず今日も元氣に配達しており、成績も良い日には四軒というすばらしさでした。

Qの
このように短かい日々でした。多くの経験を積み自分でうれしく思っています。この経験の中に私の一番いいやなことはこうです。今日の人達の一部は新聞の長欠よりサーヴァイス団にもくまっけてくつてかかります。

私の心に一番深く残っていることは、………夕刊………ごくろうさまといわれたときの気持ちがこの一しゆんが毎日の勉強を能率的にしてくれるとともに非常にうれしいです。

その取場をやめたわけ

(男) 定時制高校二年生 十六才

私が学校を出てすぐ入った会社は〇〇県にある某工業KKという会社で従業員は約千人位、私は余りの会社へ行きたくなかったが就職難である今日幸いと思い大きな望みを募みつゝ入社した。しかしその夢も初日にて破れてしまった。一番私の心が傷つけられたのは、採用の時と入社後の違ひ事、又人事の者の余りにも冷たい態度「苦しいやならずやめてほしい」。私はその場でしばらく立ちすくんでしまったが、別に勤怠がある訳でもなし」とに角一生懸命やりますからお頼ひします」と頼んでその場をどまらしてしまつた。しかし、この様に分つてゐる事なら何故前に云つてくれなかったのか、非常に残念でならなかった。

職場に案内されブロック別に分けられたが、どうも初く気がしない。そうかといつて自分の自由にたらないし、朝来ればもう帰りの時間を案しみにする様な日々がくり返された。私はこの会社の雰囲気についてできる限り知ろうと努力し、又尊敬できるできないに拘らず先輩から師くだけ聞いた。十人十色とは全くこの事で意見が全然違つていたが、約一ト月位して大体つかめた。まず従業員の新陳代謝が非常に激し

い事、団体精神が養われていないで、誰も自分さへ良ければ、と云う若えを持ってゐる事などがこの会社の弊害であると云つても過言ではあるまい。まず日課の體になつてゐるのが、パンとおかず買ひ。時には会社の外へたばこや石けんを買ひに行かされた。一度従業員の家へで面をつけば屋へ行かされた時は、とても悲しかった。これらの買物をするにしても、昼休みになつてからでないかと、事務所の方でうるさいし、又買物がおそいと取人から何んだかんだ云われるし、時にはさまれた奴達は本當に困つてしまふ。それから仕事を教わるにしても能率給なので氣がねえしながら教わる始末。一日の内の大部分を掃除、手伝ひ、買物等でうすまつてゐて、仕事をする時間は非常に少い。又時には事務所の方から急ぐ仕事をやらされるが、一向がまわらず取人からもしつづられるので非常に困つてしまふ。ある暑い夏の日の事である。私は取人から水を振んで来いと云われた。他のブロッツの者は工場内の水道を常に利用してゐるのだが、どうしたことが、私のブロッツの人達はそれを利用せず¹⁰⁰ ぬいぢれた井井水を利用するらしい。その日はもう三、四回くんで来だし、又朝から非常に忙しかつたので別に悪意が有つた訳でなく、きりのつく所までやつてしまおうと考へながら、わずか五分位である。仕事を続けたいから叱られてしまった。その取人の云うには「今の見習はヤ一、生意氣だ。云われたらさつさと行動をとつたらどうだ。昔の見習みたになぐられないだけでもしあわけだぞ……」と。私はその時云つた。「それは時代の風潮というもので、今は民主主義の世であるからなぐる権利はない。なぐる方がどうかしてゐる。」それでその場はなぐられずにすんだが、非常にくやしかつた。私は考へた。昔の徒弟制度の様なものが、未だ残つてゐる。こんな大きな会社でさへこのような事があるのだから新工場などどんなだろうか、誰かに見習である以上すなおに行動する事は私にはわかりきる程わかつてゐる。然し、私の立場も考へてほしかつた。

今すぐ水さのまなければ死ぬと云うのでは無い。たとへどうだとしても常に水道がある事だし、その位の事は子供でも判断がつくと思ふ。その日以來何度やめようとした事が。その度により先輩からなだめ

(20) られ、このように事が何度かくりかえされたが、遂に退屈した。現在は職さがしをしながらい定期制高校に通っている。

希望を見つける

○ 機械工 十六才

これでよいのだろうか。結果はたえず動いているではないか。人は一体何を目指すべきか。——柔かい春のか。大自然の中に毎日またのしく有意味に暮らす事こそ人間生活のモットーではないか。——柔かい春の夕日を浴びて私は考えた。ふと空を覗上げると黄昏に染まった雲が母かに流れている。又今日も一日終って行く。平素以来何を身につけて何を学んできたのか。何のために働き、食べ、生きて来たのか。やがて私は立ちあがりゆっくりと歩きながらこんなことを思い出した。それはいつか読んだことのある「一輪」という短いものであった。

AとBは毎日同じ道を同じ転場に通っている青年。

「この土曜に今年もふきのとうが芽を出した。子供の頃君とよく遊んだ土曜だ」と、Aはいつものように姿正を正して道の真中を歩いて行く。Bはサイダーの口金をつけた。

「サエツ 五円玉でぬいのかい」 ぱつとつばを吐いた。Bは一度道をがま口を拾ったことがあるので、いつもうつろき加減に歩くくせがある。Aは空を仰いで「梅がほころびたな、もう春だよ」と、いつた日はこの空模様では明日は雨だ、俺の靴は濡れている」と、くさる。Aはかるとびあがり、節の太い指で梅の一枚を折るのであった。やがてさ、やがてAの机の上には梅の一輪が飾られ、その清葉を花の香は部屋一ぱいに薫うことである。

——もう夜の灯が燃えはじめた。さて寮舎に帰ってこれから何をしよう。食事、読書、毎日このよう

反平々凡々とした生活をしていてこのまゝで終ひるのであるうが。いけない。「回転をつづける時代の電車からふり落されてしまふではないか。」と心の中で小さな声で私を自覚めさせた。「そうだ、勉強にばげあのだ。新曲に見た。高校通信教育の、好きをばら、今望めるたゞ一つの道」その翌日早速はがきを出す、数日経って親切な案内書。「よし、やろう。暇まできつと」。素直らしい教科書を手にも今日から高校生だ。友達に負けまいでしつかりやろう。あせらず、おちついて最後までやるのだ。一日のうち八時間隔り、八時間働き、あとの八時間をよりよく用いよう。「余暇活用」という語がある。私はその日から、希望にみちた生活に入つた。かつてない嬉しい感じが胸一杯にあふれた。生きるのと飲どれほどたのしいものであるかという事を悟つた。

夜学生 の 希望

(男 義 成 工 十 六 才)

ぼくがこの電機会社の養成工になつてから、早くも一年すぎ、かなり工場の空氣にもなれて来ましたが、工場は規模も大きく、従業員も千人近くおり、夜の町工場とはずいぶんかけはなれた感じがします。

ぼくの父は小さな町工場へ勤めてゐるのです。その工場の内部の様子は全くお話になりません。ただぼくが中学三年生であつた夏休のことです。ぼくはすでに進学を断念して、工場の生活を知るために父の勤めてゐる工場へ、一ヶ月ばかり、アルバイトに行きました。

機械のベルトが何本となく巻れ下がり、コンクリートの床は油が流れ、その上こわれてくぼみができ、くあり、又茶色の鉄の屑が落ちてまねに満ちてゐません。工場内は真昼でも暗く、うすぼけた電燈の光で仕事をしています。仕事を始めれば古い機械はすぐ大きな騒音を出し、工場の建物全体が震え、油が茶色う煙となつて煙突をつみあがります。それに寢は小さく、工場内はすごい暑さです。朝の八時から熱の五時まで、ぼくも父に教わりながら毎日同じ仕事をしました。来る日も、

（22）
絶き、ほとんど自分が機械の一部にすぎないという感じで、毎日の感激も愉快さも全く味うことができませんでした。それ以来、私の頭の中には工場といふ或二人なるものだ、という觀念ができてしまいました。

ところが中学の卒業もあと三ヶ月に迫つたある日、先生からのこの機械の養成工の試験を受けて見ないかと勧められ、その時の話によれば給料も多く、半日は勉強で、あと半日は実習するのだということなどもきき、それ以来はくは是非そこへ入りたいと思ひ出しました。

求人はわずか十名のところへ百数十名の応募者があり、その就職試験は激烈でありました。幸いにもぼくは幸運をつかみえました。

喜んでのは、ぼくよりむしろ母でした。その時から何となくぼくの肩に重荷を感じはじめました。といへますのは、長男のぼく以外に家を助けるものはなかつたからです。如何に工場の設備が悪くても、最後までがんばらなくては……と僕は決心しました。

しかし、今から思えばそれはこつけないことでした。なぜならこの選抜と町工場とを比較するのが頭から誤りでした。風通しのよい、明るい上に安全装置も完備してこれ以上何を望みましょう。働ける者にも工場の立派さがよくわかります。その時からは又工場に対する考えが変りました。

僕は有願天になつてしまいました。その上規則正しく手仕上と機械の基本実習を、明るい実習場でやり、残りの今日は、国語、英語、数学、電気、物理、工法、体育などの課目で十分に勉強もでき、すくすくと伸びることができました。

それにつけてもどうしても危れることができないのは、父のゆくゆくは悲慘な町工場のことです。工場の設備が余りにもちがいます。何とこの國の力で改善できないものか……これは僕の心にある深いなやみの一つであります。

この電機に入社ときまると大きな決心と共に今まであきらめていた進学の気持がむら／＼と起きてき

きました。特に教育を受けてなくては馬鹿にされると思い、また中学校の友達が進学していると、自分だけが取りのこされた様な気持ちになり、私は再び迷つてついに定時制高校に行く事を決心しました。

入社してから夢のように一年すぎると、新入養成工と共に、二人の高級平業の技術見習生が入つて来ました。この二人の姿を見ると、僕はある不満を感じました。その不満というのは、高級平業に入社した人は、その日から技術者としての待遇を受けていることです。出勤票も承認の入つたもので、ばくらのとは違つています。ぼくらは日給者であつて技術者は日給者なのです。ところが工場にいる先輩で、夜学の平業生が日給者になるには、養成工を平業して更に三年以上を経過してしかも試験にパスしない限り日給者の群から日給者になることができないのです。

或る時、夜間高校で井筒大会があつた時の事です。その時、来賓の方が激励の意味で次のようなことを申されました。

「諸君は君は工場に於て腕をみがき、夜は学校に通つて頭を練る。そういふ諸君が、何んで社会に認められないと云ふことがあるう。技能プラス知識……これが認められぬ、と云ふことはありません」と。ぼくはそれを聞いてうれしくてなりませんでした。しかし、一步工場に入れば、夜学生の平業者は日給者として相交らず、機械にとり組んでいるのが現状なのです。

ぼくは夜間の平業生も一般の高校の平業生と同じ様に試験を受け、成績のよい者から選ぶようにすることは不可能ではないと思うのです。優秀な先輩の中には技能は無論のこと理論にもすぐれた人が沢山居ります。

一年前のぼくは工場の立派なのに驚きました。しかし、今は日給者と日給者の溝のあるのに、一つの不満を感じています。

考へが足りないとか欲が強い、と思う人がいられるかもしれませんが、しかし、ぼくはもつと勉強して伸びたいのです。そのため毎日の仕事を終え夜学に通つていなのです。

忍まれ、思わずつくだめいさに、身をぢぢめることも度々あります。家につけば十時近くです。風呂に入るのさ文様になるほど疲れが出ます。このような苦勞と斗っているのも伸びんがためなのです。あるいはばくよりもつと思ひ條件のもとに夜学へ通う人も多いことをしよう。

このような苦勞も苦勞も眞実のところはより立派な人になり地位の優れた人になりたいからです。この様子を看るのには間違ひでしょうか。あるいは身分不相応な希望をのぞきようか。自動車王と云われるフオードも一介の職工であつたと聞きます。僕はフオードのようになることは希望してはおりません。然し力のあるものにはそれだけの価値を認め、希望を与えてほしいと思ひます。

S君が可愛想だ

(勇) 養 成 工 十 五 才

指折り数えて八年前、忘れようにも忘れられない終戦の年。百姓の長男として生れた僕は、この年から鐵を握り、鉄を握り、百姓の手伝いをこゝれ始めた。当時小学校二年生だつたが、その頃のことば今でも走馬燈のように穿んで来る。箱の手も借りたという、農繁期が来ると……

時計がボンボン……と五つ打った。母が黄面をあげるのので仕方なしに、目をこすりながら床から兩れる。お茶づけ御飯を腰につめてあと、母からありやりに、粗末なぼろくろの服をきせられ、大きな麦わら帽を頭につけ、鐵を腰に差し、素足で野良へ急いで行く。空では星が一つ二つぼくらをばげましているように、キラ／＼と輝いている。母に箱の刈り方を教わると、藪の中まですぐめれになつく、一桧一桧と刈っていった。お日様が出るのはそれからのこと。藪奥になると芽はだら／＼と体中からにじみ出る

もうやめようか、もう帰ろうかと何度思つたかわからない。しかし、叱られるかわからないから、帰るわけにはいかない。又一株一株と日の暮れるの左にふりに刈つていった。ようやくその日の仕事が終わつたと思ふ頃には、空から星や月が、ぼく達を照らしている。日の光を頼りにぼく達は我が家へと足を進めた。夕食はそれから焚くのであるから、その間の空腹といつたら――。

その食事に在るといふもの倍近くも食べたが、それでもまだ腹一杯とまでは行かない。食べ終るとすぐふとんにもぐり込む。

これが、小学二年頃の一日だったから、それ以後はもつともつと夢が激しかった。こんな生活は、將來続きそうになかった。家の戸主权を持つ祖父は「百姓の家に生れた者は、百姓だ」とあつさり云う。ぼくは他の誰に付きたい。ぼくの好きな鼠に。そうしてぼくの短い一生を終りたい。でも長男に生れたぼくは、どのようなことがあつても、百姓から賣られたいのか。なぜならいふ鼠に付かぬば

ならぬか？

中学三年にもなり、平素目の前に進み、ぼくの一生も百姓かと思えば、生きる気がしなかつた。家が農業で長男のA君、K君、Y君も皆この向題に悩まされている。もうどうせ百姓なら、勉強もしまいと思つたのもたゞくであつた。家でも時々そんなことを云われる。こんでへたぼくにはならない。何かり方法で、祖父や父母を納得させられるに違いない。と思いついたのが勉強であつた。学校中一番になればきつと許してもらえる。それを実現するために、そうとうの努力が必要だ。それからというものは、全くのカヤボコ生活。そのお蔭で模範試験には男子中トップになることが出来た。お前がそれ程云うんならという祖父の言葉が出た。この言葉が固きたいがために、身の減るのも我慢して、勉強して来たのだ。これまでは、くそぢいだと思えなかつた祖父も、その時だけは、なかく理解のある、良い祖父だと思えた。ぼくがもうすこし勉強が出来なかつたら、今は野良で、ひねもす飯を振っているに違いない。

日本の大半が農業であるから、ほくのような立場のものは、教えられるばかりで、教える立場のものはない。農業ばかりではなく、他の職業にもあるだろう。その人達は自由で雇われ、希望もなく、暗い生活を送っているだろう。たゞ嫌なながら、契約のために使われているのだ。家出したり、死を願う者も出てくるだろう。将来の日本を背負う青年が、このようであつて良いのか。芝間の人達はこの問題をどう解決してくれるか。

学校の先生も、教壇で職業選択の自由を声高からうして叫ぶよりは、實際にこうした問題を解決してくるべきものだ。

ほくの希望はない、いよく工場に就職することに決定した。先生や、職業安定所の方第とも相談した結果、〇〇電機を選んだ。〇〇電機は大工場で、就職者は皆んなこの工場を選ぶという有様で、入社は困難であつた。

「成績が良いのだから入れるだろう。心配するな」と職業安定所の方や、一部の先生が励まして下さつたが、殆んどの先生は「ツテがあるのか」と尋ねられる。あゝ、そんなものはあろうはずがない。H君とS君が他の工場へ受験した。学校の成績も体格もはるかにS君の方がよく、H君は悩着たつた。学校の申込ふところへ話が出た。「H君とS君が〇〇工場に受けただろう。どちらが通つたと聞かう。」「そりやあ、S君にきまつているよ。先生だつてそう云つていたぢやないかし」と皆んな口をそろえて答へた。「違ふ。H君だよ。あいつはツテがあつたからな。S君はそんなものが全然なかつたんだ。君もツテを暇さなきあ、急いせ」とほくは向つていった。その話が本当だとすると、じつとしてはいふれない。ほくと一語に受験するS君とH君も皆んな、ツテがあるように聞いた。父母にも相談してみた。母は近所や親類を、駆け廻つて頼んで下さつたが、どうしても見当らなかつた。「今はツテさへありやあし。と芝間の人が云つていたのをたゞ／＼耳にしてきたが、どうもそれは本當らしい。」「なほS君がすべつたのだろうか。どうしてあの願者のH君が合格したのだろうか。」「ほくは職業で一人不遇に思

いつ、夜を過すのでした。「よし、実力で通つて見せる。もう頼るものは自分より他に何ものもない。堅い決心をして学習にはげんだ。しかし試験日が一日一日と近付いて来ると心配でたまらなかつた。「実力なら工君にもN君にも、それだつて負けないのだが」と思つてもしかたがない。ぼくは一人ふと人にもぐりこんで、「ツテさえありや」と泣いた日も何日かあつたろう。試験の結果、見事パスすることができた。「どうだ、実力が入つたぞ」と吹張つてみたかつた。今度は勉強といふ心に迫られ、安心して寝られる日が、一日としてなかつたが、始めて安心して眠る喜びは寝られる日が来たばかりの知つてゐる大工堀^{くさ}さへ、ツテを入つた者がいるとかいうことを、耳にしている。ましてや一般の工場には、このツテが多いだろう。実力のない者が入つて、実力のある者がする。そんな馬鹿げた話はない。あくまで、実力があり、まじめな正義のその中を希望する。すべつたあのら君のことは、忘れられない。「工君よ、君が悪いのではない。社会が悪いのだよ。大人達が悪いのだよ。これから就職する者が、安心して就職出来るために、ぼく達はこの問題を社会へ訴えるのだ。こんな不正な社会は、早くはごめんだよ」とね。

「今は誰でも好きな服につけますよ。そして実力天下のその中ですよ」というようなときが、一日でも早く来てくれることを、急願してやまなり。

私の声

寛政印刷工十七才

(22)

中学校を卒業してまもなく全日制にはいつた。しかし家の都合でどうしてもやめなければならなかつた。将来のことを考へると、どうしても高等學校の教育だけはつけていなければならぬ。早くには父も

まいし、母もなり。そうだと全日別にいけなくとも、まだ学園の道がみちがけしてゐる。ほくは漢學の仕事が
 すんでから「あのおれは學校にいきたいんだが」「學校にふ」「うん、親戚の考査があるんだ。どう
 しても學校にでたいのや」「さんなにさだいならぬをいふだろ。そのかわり、でるのをら出るよう
 にがんばるように」といわれ、ほくは大変うれしかった。祖母も、祖父も、大変理解があり、ふじ入學し
 た。とうさん、かあさん、番番りますと軍員にふめつてほくは心に喜んだ。どこまでいってもかわらぬ
 いしールのような將來への希望にもえがう……。僕の親主は學校に大変理解のある人で夜間に
 出るのだからといって五時にはちゃんとすまして下さるので感謝している。今度の学園水の考査の時わ
 ざく、休まして下さった。ほくはこんな風に良い所に就職できたことを心から大々喜んでゐる。しかし、
 またしかられることもある。「君は無依だ」とか「君はもつと仕事に力をさかしてくれな」と、自
 分はこんなにいわれるのが残念で涙が出る。ほかの会社でも働く人のこととをもつと理解してくれたらさ
 っと明るく会社となり楽しく仕事ができ夜間の生徒はどんなうれしいことである。五時に眠るを出て
 學校へ行くことが私にとって唯一のたのしみでどんな辛いことがあつても學校へ行き先生のことはさ
 へ、多勢の友達と話すすると、その苦難はどこかへんとんでしまふ。學校は学園を敏える以外に私たち
 のつかれを癒やし、私たちをたのしくしてくれる場所である。このようにして私たちは高等學校までは
 勉強ながら學んで行かれるが、国立大學に夜間がないかぎり高校以上にすゝめないことを忌避する。何
 ものの學校対策がないかぎりわれ／＼の願ひは無意味にすぎてしまふだろう。

私の生活設計

(男) 藝 工 十 六 才

中学校生活から一躍実社会に飛び出して来て、あまりに今までの生活と相違があるのに驚き、一日も早く慣れよう、慣れなくてはならない、と考えた。私は、日々の生活があまりにも味気なくなにかしら单调な感じがするのをどうすることもできなかった。毎日、全く暇がなく、「勉強に迫られる」と云う言葉がそのままだてはまるような生活で、現在まで二月三月とあつと思つてもなく過ぎ去つてしまつた。何故勉強に迫られるかという、会社でも勉強しへる程度、学校の教員及び専門学科並びに実技、夜学でも勉強し、進歩シーズンともなると、会社と学校と学校のそれとに扱はさむとなり、余程巧く動かないことには、「あふはちとらず」となり、どちらの成績も速くなることは分りきつてゐる。

私はこの单调でしかも多忙な毎日を送つてゐるうちに、「これではいけない」と感じた。私は生活には何も「ウラン」がなかつたのである。そこで、ある日曜日に「ウラン」を立てた。どんな「ウラン」であるか、その細部は記せないが、とにかく、一日二十四時間を分けて、睡眠時間七時間半、学習時間(夜学のみ)三時間、作業時間七時間、運動時間一時間二十分、食事時間四十五分、休息時間一時間半(入浴時間三十五分、就寝時間一時間)と大まく分けられる。この中作業時間は火曜日と金曜日のみ学習時間となる(学科日)、洗面、その他、雑用を含むとじんの通りの多忙さである。しかし私は、これではまだまた時間の使い方がへたなと思つた。もつと有効な時間の使い方がありそうなのだと考えた。要するに学習時間を増さなくてはならないのである。そこで休息時間中三十五分は就寝時間に長えた。又、その他の時間に当はまる、登校してから授業開始までの一時間を予習の時間にし、会社の者の予習時間は、日曜日に十分時間を取つた。このように時間を合理的に使わなければ学習面に於て、人に及れをとるようになる、私はそんなことになりたくない、少くとも同輩より以上に勉強し入格の

明治に努めることと決つた。しかし、病れてはならぬことがたつた一つある。それは「健康」である。いくら生活の合理化を計り、勉強に励んだとて、病に倒れたらそれきりである。こう考えた私は日曜日には、必ず十分眠る事にし、日曜日以外の日にできないことへ例えば登山、陸上競技、その他の運動を一つずつ行つた。その結果一週間の疲労は回復し、次の一週間への活動力が体内にもりもりと蓄まつてくるのを感じることができた。このようにして遂に私は、少し時間を征服し、共に社会の多忙さをも征服したことになる。しかしまだ研究の余地はある。

私は現在夜間工業学校に通い、勿論昼間は養成工として会社に通つてゐる。が、私が夜学生となるには様々な障害があり、自分自身でもかなり悩んだ。まず自分の身体が一つの悩みの種であつた。若いうちに、でき得る時に勉強はして置かなくてはならないと云ふ事はよく分つてゐた。しかし生活の基盤は何といつても身体であることもよく分つてゐた。これが悩みの種であつた。私の身体は、中学時代を通じて陸上競技をやつたので、かなり鍛錬なはずである。が、よく病氣もした。ために完全な身体とはいえない。それに昼間歩いて夜学に通うことは、かなりの重荷である。決して自分の身体が保つたろうか。この問題は一番重要な問題だと考え、私は慎重に考えられるだけ考え、先輩の意見、家族の意見、先生の意見等も、よく聞き、自分の考えと綜合して遂に結論を出した。数日間悩んだ問題ではあつたが至極簡単な結論であつた。「休戦しなければならぬ」。これである。学校生活と云ふものは、個人の教養を高め、道徳的性格の育成には、なくてはならぬものだ。いや、その生活の中にとけ込んで道徳的人間となるべく努めなければならぬ。と考え健康に留意しつつ、私は夜学に通う事に決意し、現在通つてゐる。私の身体が、果してこの二重労働に耐え得るかどうかは、また半年も過ぎない現在では解らない。とにかく私は、何事にも、自分の身体をぶつつけて、体験することに努め、私の「十代の全精力」を集めて、多難であらうこの四年間へ定時制四年間をへ勿論その後も「克服する決意である。」（しかしあくまでも自身の「健康状態」と相殺しつつ）

私は、私達が、確かに中学生であつた頃とは心算共に重要な改良を遂げてゐる。と思ふ。と共にその改良した。いいかえれば、一歩前進した心算を尚さら有効に使うことこそ、私達若人に与えられた特権であると考える。「鉄は熱い中に打たねばならない」といいかえれば、私達は十代に於てこそ「鉄も強く」打たねばならないのである。

幸福な生活の礎をつくらう

(男) 發成 工 十 七 才

二月十九日、それは私にとつて一生運應れることのできない日であります。この日から少くとも私にとつては差恥と不自由がつきまとうようになつたのであります。

その日は朝からとても気が重く、元氣よく仕事に取りかかつたのであります。ちようどその頃私は基本実習で小さな万力を作つていました。最初のうちです。から削りしろがとても多いためグラインダーを使用しました。指車動からグラインダー使用を禁止されていたのを知つてはいました。が、小さなものは以前からよく使用してしましたので、その日もそれを使用してしまひました。けれど、どれだけでも削ることのできないものです。から大きなグラインダーを使用したのです。そのグラインダーは相当石くて使用法如何によつては熱線工でさえ少し危険が伴うような状態でした。しかしグラインダーの危険性や使用法についてはあまり知識を持たぬ私にとつて、そんなことばかりはす。が、あります。その上大きなグラインダーであればそれだけに注意が必要ですので、小さなものと同じ要領で使用したのです。使用中突然無意味な音と共に品物が促はされてしまひました。驚いた私はさうと後へさがり品物を探そうとして、かゝと手を見ました。指が傷んでゐるではありません。左手、中指の先が促ひ、さくろのようにさけて指の中から、白い膏がにゅつと出てゐるではありません。この時の驚き、嫌我夢中で指車動の所に

かけつけ、すぐ病院へ駆け込みました。ベッドに伏して左手にかけられ、柵の間から、一瞬のうちに無惨にも取り戻した自分の指を見つめました。悲しみと後悔と言ひようのない横りの涙が、彼から止め渡もなく流れて来ました。「あゝ、遂に不具の身になつたのだし、やがて手には面白いほろたいが一瞬に腐々しくまかれ、恥を肩からつるし病院の門を出ました。そして指環といつしよにグラインダーの所に行きました。墓石にはどうも悪い血が三、四ヶ所べつとりとしみついていました。「これが指をとつたのだし、こんなものをなぜ履つたんだし、なぜもつと銀指を完全にしてなかつたんだし、若君を失つていた私の愛の中はこれらのことではいつぱいになり、グラインダーの所に若しくなつて立つてゐることまでできませんでした。手術後四、五日の夜は唯悲境の涙にくれるばかりでした。そしてまた私は左手の指の肉筋切断という不慮の災災のため、三十日間の休養を申し渡されたのでした。技能習得の途上にある氣にとつて三十日間の休養は大きな難手でありました。白布で眼を肩からつるし毎日病院に連れねばらない悲境の中にある私は、会社で力いつぱい元氣よく奥君に勉強に励んでゐる友達の幸福そうなる愛を思い尋べ、自分の境遇とのあまりの差にうらやましさと悲しさとで胸がいっぱいになりました。あゝ、災害はどれほどその人に嘆きと悲しみを与えることがどれだけ大きな不幸を与えることか。私は災害の悲しさを身をもつて体験したのであります。災害は直接傷による悲痛、経済的不安、技術の低下、西それのみが家族に会社、知人に大きな迷惑をかけるのです。日が過ぎるに従ひ傷もだんだん癒えて来ましたが、それと共に心の中的な痛みもうすれてゐる。自分の不注意や知識不足について考へるようになりました。災害の原因は何か？とつるどい注意と作樂知識の不足ではないでしょうか。私の場合はまつたくこの二つに原因するのです。もし人々が幸福に生きたいと願ひ、仕事のみならずすべての面においてするどい注意と、仕事に對する十分な知識を具備してゐるならば、家庭の不和も不慮生ずる生計と當然そこからくる疲勞等も起さず、毎日会社で安全に楽しく仕事をしてゆくことが出来るのではないのでしょうか。よく現場でほんのわずかな注意すら守らず、冒険するのを目撃します。手袋をはめたまゝヤスリ仕

事をしていて手がすべり手首を切つたものや、素手で切粉をつかみ手を切つたものなど、小さな負傷だからいいようなもののもし大きな災場でもしたらどうしよう。ここに私は「すべての面に対する鋭い注意力」と「仕事に対する十分な知識」を持つて、その上に立つてこそ初めて安全に仕事をしなくてはならず、私達の周辺から災害を排除してゆくことができると確信するのであります。私運動好きは身辺から災害を排除して、最も勤勞生活を樂しく明るくより幸福に送つてゆくではありませんか。私は今度のこの災害を無恥にすることなく、「酒を飲じて痛となす」としたいと思つております。今はすつかりよくなり仕事も十分やつてゆけるようになった指を常に更つめ、不注意になりがちな自分をいしめ、一歩々々堅実に穩い勤勞生活を悔なく幸福に送つてゆこうと思つております。

父の地下足袋によせて

(女) 紡績工十八

「眞生子・そんなにいやら止めてゐるか。」「父の聲にビクッとしておりました。久しぶりに寄道會から歸入り明日のおひる迄自分の時間だとうれしい光をおどらせて、いつも早起きの父といつしよ。早くから道徳の手入をしてきた。しばらく更ないうちに書葉がもりあがるように美しく高ひかおりを切らせていた。きれいに揃えて切つたなわをこれも同じぐらゐに切つて揃えてある竹と竹とを重ねて、ばつてん印に三分の一の所でくくるのだと父に云われて、先刻から私も父に勉強し危なっかしい手つきで一生懸命にしてみていた。

「父ちゃん、そんなこと云つたつて母ちゃんはどう言うのうか。」「私は驚いたし何分の声があわづつてゐるのを意識しながらうさした。」「そらやつてマー公がじやなら母ちゃんどつてどうも云えん」と思ふがね、父はこつこつと仕事の手を休めなりで先へ進んでいつた。」「マー公はどうし

て是にそんなに窮乏がいやになつたのかな。父ちゃんはいふも分らん。人知した時分はひどいよ。こんなで幼くと云つてたもんだがな。どうしたんだ。父の声は相成らず憂しかつた。「うんべつに運出つてないけど、どうしてもいやををまらんもん、餓餓つて所なんが少しも悪いと思えないわ、春にからなに運出しないと。思ふ。みんな所で私がゆけるとおもていたのが始めから間違ひやつたのよ、おえ父ちゃん。私はハッ目の内をくみ合せながらう云つた。父は時々ゲンゴツで鼻の頭をグスグスンといわけなから左りこんで仕事をしていた。先刻からみると大分差なりながらつていつたときみえて私との距離が遠くなつていた。「朝早く起きなければならぬだ、はやくこれだけ仕事が出来た。マール公が手つたつてくれなからこんなにはかどつたんだな。マール公。父は私の云つたことに返事もしないでう云いながらう云ふ。と私の方を見た。父だつて口ではあう云いなから実の所はやつぱり止めさせたくなんだ。私が幼少をよしたら父母が困ることは火を見るより明らかなで小さい兄弟も何かにつけて悲しい目に合うことは私にも分つてゐる。私の生まれた時分は父もまだ若かつたし子供も幼なかつたしまさかマール公を紡績へやろうとは思わなかつたといつたが父が云つたのを思ひ出した。父のはいてゐる地下足袋をみるから私はジーンと涙が湧いてくるのを感じた。左足の子指の所が丁度一センチ四角程破れていて子指が足袋の端から少しのぞいてゐた。時々ケイレンするようにピッピクッと動いてゐるのを私は先刻から何べんも見えた。父だつて困つてゐるのだ。私はこう思ひ二重に涙がこぼれるような気がした。

私達農村に住む者は貧しい。農村だけではなく戦後後の日本は特に。しかし中には富める人々もいる。いつも皮らぬ生活と地位と財産をもつてゐる永久に。社会が変らぬかぎりいつまでも。父が破綻の下で働いてゐる農家のあい間あい間に。「貧乏人は馬鹿だ」と彼等は云う。しかし馬鹿を顧してゆけば家族全部が生きていけないからだ。のびのびとした文化的生活をのぞみなならどきる才能や意欲も有るが親身に金のない農民の子奴は一番苛酷である。貧乏の苦境への手だすけをしたいと思ふようになる。都会の家庭ではお父さんだけの収入で一家が基に生活してゐる。家庭もあるのに一休農民の生活は一家内中

子供にいたる迄何かしら仕事をもちている。そして尚教育生活しじのだ。

考えから考えに私はだんだんとわかれていった。

十九枚のたふみのしいてある部屋に、八人がいつも思い思ひのかっこうでごろごろ牛のようにからだを横たえている。真夏の間はぎまつて仕事につくまで暑がぶうともなひにブツブツ仕事がいやだといひあう。九の夏もあるうだるような臥場で八時間ぶつつすけにゆくことを考へると嫌だつて自分不幸だと思つぬ者はあるまい。

二交代で一週回すつ先番と後番がくり返される。前番は朝の四時に鐘の音で寝を醒められ五時より午後一時四十五分まで、後番は午後の一時四十五分から夜の十時三十分まで。その内ゆつと四十五分の食事休憩の時間。そして部屋へかえれば一時間半ずつの学校の授業。最低必要科目は勉強せねばならぬ。全く非人間的な生活。

臥場と寮生活がつながりあつてゐる關係上ささいなことからも大げんかになり長い間不機嫌な氣持をもちつづけねばならない。心ない者のために時々暫の忍耐が分散し部屋の空氣が圧迫されてくる時。こんなことを考へて見ると自分がまじらなくいじらしくなつて来る。農村が東京のようになつてゐるから条件の悪い紡績へ女工を転移する人もさえないし、こうした非人間的な生活がいつまでもつづけられて行く。

紡績人は外部からしやむんされてゐる。何故に？寮生活をせねばならぬから。何故に？交代制であるから。作業を完全にするために私生活がなくなつて皆が無味乾燥で刺激なくのろまな生活に入つてゐる。十枚きつつぎなし——とうとう言葉がある。しかし交代制がなければもつともしんけんに言葉を考へることができぬ。学校の設備、その他のことは一応とこのいゝをみせてゐる。しかしどんなに始めに勉強しても考へてもいつか他は何かへの。腹にいらぬ意知れぬうつろを抱いてゐる。何故か？紡績人は外部からしやむんされてゐるしこの一言につきる。

少しでも高い理想を持ち、文學や音楽を語つたりでゐるのは場所によりけりであつて、それが大で居つたりすれば「むずかしい」とは云わないでしとすぐのけものにされる。これはどうしたことか。自治会を自分を少しすつでも向上させようとうたつたのが何にもならないじやないか。自主性もなく向上せもなく。なにかにつけてこまかい勝負がはげしく、ねたみどりがぬがまだまだ生活全体にはびこつてゐるそれがたえられないんだ。芳ないんだ。本当に醒いんだ。こういう所に浸透してゐない。自分にとつてマイナスになるから早くのがれいつそのこと他を顧みずか。

こゝまで考へてきて私ははつとつまつた。こゝで自分が止めたならそれこそ自分が一掃よわい。だけれりも、環境にまけるのではなく環境をひらいて行くのだ。私の目ざめそことは十人をめざますかもしれない。自治会を発展させ大きくは勉強家の総長だ。そうだもう少し自分が辛抱して自治会に都合に順を出さねば。皆が何をいつたつて。いつかは分つてもゆえると信じて。自分のでゐる範圍内で自分の声を出さねば。町村の子女がさげすみと醜態の中で恥辱に生きなくてはよい社会をつくるため何かのことをしてゆこう。小さくとも幼くとも。自分がもう少しゆげば父が父でつて破れた地下足袋をはかなくてすむ。私が買つてあげられる。私は自分にもはつきり分つた。自分の盲が生つとしてきたことを、とつぜん父の言葉がきつた。「國彦子何がそんなに矛盾しとるんだ、勉強という所はし私ははつとして立ち上つた。コラうんもういいの。しこ云つてスカートについでゐるなわくずを履ててバタバタはらつた。私が考えこんでゐる間に父は全部仕事を終つてした。いよいよだつたら止めてきてもいいよ、いよいよゆいていてクダでもしたら大変だからな。止めて来てじつくり考えにやあかん。母ちゃんともよく相談してみてな。し父も立ち上つた。又左足の子靴がピツツと割れた。

へ父ちゃん今夏の給料で地下足袋を買つてあげようし私は一人で靴の中でつぶやいた。

小さな領い

(女) 事務員 十七 文

(39)

喜慶へ行つて勉強したいという望みも、幼く死むを相成する時じつの向にがたれてしました、卒業すれば町役場の事務員に、飯で一番先に就職先が決つて、「あんなふうになんか、こんな具合に」と子供らしい事を考へながらお務めする日を待つていた私はほんとに幸福でした。卒業すればすぐ次の日からとの望みに、父がでるまで一月程待てというその一月が経ても、何の音さたも無いのに葉を煮やした先生が、「どうなつて居るのですか。まだ一カ所事務員長の採用試験が残つて居るので受けさせてもよいでしょうか」と尋ねて下さったのへ町長さんは「私も思ふだ、一目置かうといつたら必ず雇いますよ」又祖母が役場へ行つた時も「Nさん近じ近じ、もうすぐですよ」とおつしやつて下さったのが、安んじて待つていました、ある日買物に出た街で同級生の兵母様で婦人会の会長をなさつて居る方がいきなり「Nさん知つて居るの、」腹をさえさえて、「エ、何を？」と驚いて居る私へ「○○さんの彼へ××さんという人が入つたのですよ、」しつかりしないからと責めて居るような目の色、何処に冷水をあびせられたような感じ、とつさには言葉も出ませんでした。そして私が町長さんに会つて一番にきかされたのは「××さんは盛門学校を出ていますよ」という言葉。「じやあな、なぜ必ず雇うなんておつしやつたのですか。でもそれは心の中の叫びだけに終つて、」××さんは町の有力者の兵母様とか、そして助けてやると言外に耳をせて与えられたのが給仕とは名ばかりの母校の小使という仕事。早速明る日から小さな小使さん。朝は七時半に門を開き夜はみんなが眠つてしまつた後、門に鍵をおろすまで(七時半、八時半)職員室の掃除、朝のお茶、お客様がいらつしやればおもてなし、そのうちに昼のしたく、夜は未だして夕方各教室の戸締りをしてその向には「これ十時までに三枚板印刷して」「お昼お昼買つて来て頂戴」「この束つけ帳をよし」たばこ一つ買つてきて「葉々私用公用とりまけてのおい、」つけ、左ばこなんか

一つ買つて歸ればすやうなはくむいるんだつた。という具合に、それこそ一日中こまねずみのよう。どうにか一日が過ぎて始めてお給料を預けて帰つ時祖母は仏壇にお参りして「おじいさん、お母さん、さうがお金もうけができるようになりましたよ」とおねをたいていました。三才の時母に死なれ父に別れた私を女手一つで育ててくれた祖母。いまだに「おまされた」とみんなを暖みながら「世の中ってこんなもの」とおめをしなければこの祖母と二人生きて行けないのです。きょうもひとつものように教室の戸じまりをして廻りながらと黒板や机に照りこめる夕日の美しさに在学中みんなと卒業の事について話し合つた椅子に思はず腰を付けてみました。じつと黒板をふつめて、何日目か何月目でしょうか。静かに今の生活を振り返つてみました。こゝで、この教室で国語を、数学を習つたのです。努力甚事者の事を年少者の保護、送り時間、休日、福祉……どれも私には感懐い、ほんとに夢の世界の事。私一人ではありません。法を知つていても雇主の酷使に甘んじて黙つてしんぼうりなければ生きて行けない。親を兄弟を養えない人がどれだけあることでしょうか。暴卒者に邪魔されて、寝取できない人さ大いなのです。一日の仕事が済めば最後に先生方のチヨークの入替を、これはある雑誌で毎日自今の録の人みんなの絶筆削りをするという給仕さんの若から思いついた又一つの楽しみなのです。……学期末考査などには大勢級で何課目が合せて三千枚、四十枚の試験用紙をみんなが購つた後交の一時、二時まで割りました。からだの狭く限り、割れるまでがんばるのだという気持ち、そうして一生懸命働く事が、みんなによく効くさだと言つてもらふ事が、町長さん達へのせめてもの小さな抗議でした。でもその悲しい抗議に返つてきたものは、ある父兄の方の「Nさん毎晩遅くまで何の仕事があるの、女の人は特に足をつけないければいけないよ、世間はうるさいですからね。」どこかにとげのある冷い言葉でした。さへ聞れば「只今、」と上りがまちに腰をおろしたきり御飯を食べるのも、口をきくものうく、しばらく立上らないでいる私へ「毎晩遅くまで何をしているのですか。」これがお母りなさじのあいさつです。そして二言目には、小使なんので、小使なんかせて……「おれ、小使が、小使が何が新しいの？」といふつとも小

でな入達に小使さんといわれて、「違ふわ、給仕よ」と反発している私でした。「肥さ大美しければ、助業に仿ぐ事に差別は無いはず、仕事によつて人を整へつする事こそ恥すべきよしでもそれはあとなるの世帯では通用しないのです」。

「小侯さん」と、やいて、ほほに浮かぶ淋しい笑い。自らようの笑にもう私を人かどうなつてむいじのどというすてばちな気持ちになつていました。この私を救つてくれたのが重盛殿、採用試験の通知でした。それから、全然知らないちまゐが親身に道を折つて下さいました。そして今は、毎日楽しく切がせて貰っています。

せのお父様、お母様、初く手に鑑りと毛びをもつてゐる私達を、自分の子供というお氣持で、あそぶかい目でみつめて下さいませう。お願い致します。

学校の先生へお願い

(男) 體域工十五支

私は今年この会社に技能養成工の一年として入社しました。私達一年生の養成工は一週間に三日間実習があり、後の三日間は授業があります。私達は給料でなく手当と云う名目で毎月もらいますが中学時代の仲間の中では決して少ない方ではありません。私達の会社には学校のクラブ活動のようなものがあります。運動部としては野球部、バレー部、バスケット部、ピンポン部、山岳部等文化館としては音楽部、カメラ部、城南読書部等があります。城南館は一二個の双葉と云う名で発行されています。私も入社するとすぐ野球部へ入部致しました。一年生は人数六六名でA組B組に分けられております。私達B組は月水火曜日とA組木金土曜日と実習があります。今日授業を受けていてふと考えた事でありました。それは大友親友は色々費つた順ひに添えています。成程頭脳は知識山原あるいは北越道からも添えています。ぞ

うして色々な学校の先生から學んでまた友達がもう人前して、三月間へたこの日になつても全然と云つて良い位に成つて来ているのです。受けて来た悪い影響悪い影響が授業にあるいは講習に現われて来ています。これから三年間と云う耳目社会のいろいろな影響が身につくことでしょう。私は中学校を卒業し就職した者として先生方にお頼みがあります。私達の中学校は算術術にありました。映画館も四能ありますので夏休みが終りになるといつも親な話を聞かされました。私達の学校では進學するものと就職するものと分けて補習をやりました。朝は七時半から朝礼は午後の五時まで毎日やりました。進學組就職組に分けるのはいいのです。就職組の補習はものにもならないようなシロパンや面談の補習などをやつて學科の方には全然觸れなかつたと云つてもいい過ぎではない位でした。月に一回一定額の費用は出す事になつておりました。私は幾なんロパンや面談の薪などもよりもその時向に簡單な數學あるいは英語でも教へて頂けたら社会に出てからどれ程役立ちたろうかと考えます。又授業中進學者と、就職者に對しての先生方の態度、私は私達就職者にとつて腹の立つ事があると思ひ出されます。例へば正月も過ぎて三月間に入つてからの先生方の目は私達就職者には向けられなくなりました。授業中へ就職者のひがみかもしれませんか就職者が何度手を上げて先生は進學者の方へばかり眼を向けられました。これでは私達就職者もふてくされ勉強する氣も出ず、ついほかの事に時間を費す事になつてしまいます。学校生活においてこまごまこのような差別をつかれて、

私は悲しくなつてしまひ

ました。このことは私が考へて居るだけでなく私のまわりの人からもききました。二月頃になつて就職の爲め先生方に大反お言折りました。大反有難いと返つています。私達就職者一同大反お世話になりましたして感謝にたえません。しかし、たまに謝意もありました。私の経験の一つ、それは紹介状を頂くのが難かつたため何うへ行つて受付へ紹介状を出しましたところ「もううちの会社は受付けません」と断られた事がありました。こんな事がこれからないようなるべく早く伝達して頂きたいと知ります。それに私達卒業したこの日になつても就職安定所と云うものを全然と云つてもいい位にりないのです。

ですから今年度卒業される方達には就服する人達だけでなく進歩される方達にも是非とも一度見学させるなりそのでさなない場合には学校でも置く分らせておくべきではないかと思ひます。そして安定期と云うものを置く分らせて自分から進んで利用できるようにして貰ふたいと思ひます。

ぼくのくふう

(男) 藤 城 工 十 六 文

「現在日本に於いては社上作業その他における作業で基面との平行をケグくトースカンはあるがこれと直角にケグく事のできるトースカンはない。若達一つ考えてみないか。にある日実習場の片隅で先生はこんな事をいわれた。当所の巻取工として入所以来一年立つて来る四月の中頃ごろこんな事を言われた。

今まで自分から考え改善するということなど思ひもよらなかつたぼくにとつて一大革命をもたらした。そうだが今までの自分はけだものみだいに唯、人の言う通りに行動して来たのだ。こんなことでは進歩はない、もつと考へるといふ氣持を持たなくてはと自分自身に言い聞かせた。そして先生の言われた事を念頭に置いてそれから何か良いヒントはないかと探し求めた。しかし元来頭の悪いぼくにとつてどう簡単にできるはずがないと幾度か壁に頭をうたうとしたがどうしてもあきらめられなかつた。そこでまず自分達が現在使用している平行トースカンの原理をヒントにして考えようと機会ある毎に頭組んだが勿論な考えしか浮かばなかつた。

(23)

ある日実習場のボール盤で孔明け作業中とこのことが思ひ出されそれと関連してボール盤スピンドル内のピニオンとラックの機構が思ひ出された。これを応用して平行トースカンの原理と結びつけようと右記の機構と反対にピニオンを固定してラックを軸として上下運動させようと早速スケッチしてみた

まず台の底面は精緻な平面上を施しその上に台の巾より少し小さい基のパイプを立てその中へラック溝の切つてあるパイプをさしやうど井戸ポンプの様に挿入し大きいパイプを固定してピニオン・ラックにより上下できるようにして軸の下端より針を出し外側のパイプには針の巾だけの溝を切りピニオンを上につけボール盤の様に上下できる様スケットした。

あくる朝いさゝか判定題を抱いて早速先生に出した。すると先生は「よい所に気が付いた。よく考えた。しかし今少し質問をせう」ということに質問を置いて考えて見給え」とかくして僕の考えは次第に怒った。僕の考えは浅すぎた。少しでも早く考えようと思ひやりすぎたと今さらながら後悔している。

人間には考える事、特に機運的者にとつて考えるといふことは施れてはならない。しかし考える事はどんなに簡単にはかどるものではない。あらゆる事実を知つて後にじつくりなすべきだ。僕にはそれが欠けていた。「直衝のけがけるトースリン」。この十二文字はいつまでも僕の頭からは離れないだろう。

恥場のおとな

(男) 印刷工 年令不明

いまぼくの勤務している工場は工員十二名の方が働いている印刷所です。ぼくが使いたる頃から頼つて用件を請う職長な所があるとすぐ怒鳴り付けるが、悪い悪言、それを随で聞いている人が暮つてまで、ニヤニヤ笑いながら聞いていてあとで皆に言いふらすか、一緒に悪口を言う、又それが悪いのです。こうしなければならぬとは言つてくれないのです。これではぼくは改めようと思つてもどこが悪いのか分らない。もつと腹心の指導してほしいと思ひます。そしてこのようにして叱られた後は長く机に縛つていじめるのです。それこそ毎日の休み時間でも使ひにやられる。三時にし分出ないバスにこの商物は急ぐ

のたからという。又今のおとなは残まほで勝手する所があります。ぼくが仕事をしている時など自分が暇になつてまると、ぼくの所に待つて来てこれをしてくれと言ふ。しかもこの仕事はきれいにしなくてはいけないのだから、……どこをですと聞くと大きな商を出すな、主人に叱られると平気で言つてゐる。なぜ自分に与えられた仕事を自分でないのせうか。その人は友達とたばこを吸ひし難談してゐます。そんな時にぼくが専断でたまされた様な気がしてなりません。

それから外に僕に行つても、親切に接して下さる人は一人もいないのです。もちろん御茶屋さん、ななどは苦つてくれません。ただこの言葉一言だけで、どんなに忙しくても苦痛には感じません。ぼくは常にゆくまゝを求めているのですから……おとなの方や又社会の人達、どうぞゆくまゝをなべて下さい。

女中も一個の人間

(女) 女中、十七 文

思えば、私は、オ一步……出だしが遅かつた。卒業後の世の中へのオ一步が、どれだけ大事が余程慎重に考えねばならぬのを百も承知だったはずなのに、そして自分だけは間違うまいと心に誓つていたので……自分で一番嫌がつていた、求つてゐるものではないと思つていた女中になど自ら進んでまてしまつたのだ。元来の私の希望は工場が何処か大規模な所へ入る事だったのだ。そしてゆきながら少しでも多くの事を学びとる事が必要だと思つていた。しかし今の私にはそんなひまなどあるはずはない、ただ一人気をなむきだけでどうする事もできない。女として一通りのものも修得したいし、たとえ通船、教員なりとも、そしてそれが何年かかかるものであつても遠いから新校同等の知識だけは身につけたい。それにできるならば多方面の本を読んで教養を磨きたい。これが私の卒業前からの唯一の希望だった。私

は、将養母となつて、子侯にはか呼ばわりはされたくない、そして又「お母さんになんか怒られたつてわからない。しなどつとぶやかせたくはない、黙知な人というものが、いかに國國の人を苦しめ、不愉快にするか、自分の主人の例を見てもよくわかる。女中には「自分も同様の態を持つながら」休みも与えず自分は温泉に、お芝居に、映画に、そして子侯は、パーティに、音楽会に、口を送っているのだ。そして女中には多忙を理由に金、銀の三日月のお休み以外与えようとはしない。

お達也は若き者にとつて、それが、ほんの少しのものであろうとも、お休みや温泉が、どれ程明日への力となるのか知れないのに、自分の病見をも気附かず、怒鳴り散らし、又今云つた事を十分もたためうちにガラリと正反對に度えてしまうこともする。これも無知なるが故にだと思ふ。度く相母から「かまへ」を出されて、また「鈍」など云つたら「はい。」「鈍を出されて鈍だと云つたら「はい。」「決して逆らつてはいけない。」「と云われたが本當にその通り、お達の世界ではなつとくの行かないことでも、おとなの世界では当然な事なのだ。どうしておとなは自分の非を卒直に認めないのさうか？、お達には人と口をきくな、と云い入浴の時間まで制限する人が、自分は相手さえあれば一時雨でも二時間でも入っている、お達は、こう云うおとな達の身勝手な教訓に憤りを感ずる。おとなの社会の多くの矛盾に。どこにもやりようのない、どうする事もできない気持ちなのだ。このような子侯に苦しんでいるのは、さつと私一人ではないと思ふ。

私は世の無責任なおとな達にこう叫ばずにはいられません。

女中とて一個の人間です。

子侯とて、一個の立派な人間です。

あなたちよりもえらくないかも知れない。

しかし将養もつともつとえらくなるかも知れない。

子侯とて、更くひらず、人間としての生活を、人間としての価値を認めて下さい。そしてよりよい職場

を与えて下さい。

私の一日の生活

(男) 印刷工 高校三年生

連の空から真赤な太陽が上り、夏空が爽やかなように明かなくなり、丹の啼む「ミシント」の音も響く、どこからともなく鶏の鳴き声が耳に入つて来る頃起き出す。全く自分でもあきれる程の寝坊だといつても勤務時間の八時までには、必ず出勤している。七時前、兄弟そろつてそれぞれ自分の受持区域を、新鮮な朝の空気を胸一杯に吸いながら掃除する時こそ非常に楽しい。家族は九人、その内兄弟は六人だが長男である兄は他県の大卒に通つてゐるため、長男としての望大な責任は私の頭上にのしかかつてゐる。朝食の衣片付けを済ますと、さえずる小鳥のように歌をうたひながら一般に職場へと自転車でのペダルを力強く踏む。道で行き合ふ人々も小鳥や、草までも、目にうつるすべてのものが、若氣にみちみているように見える。

勤務先は自宅から、自転車で五分、徒歩で十五分という短距離なので、毎日通うのに便利である。職場の業務は印刷である。建物は一階建て三十坪程で、勤務人数は雇か七人である。私がこのような小さな職場に入つたのは小さくても立派な技術を身につけたからだ。勤務年数はちょうど一年になる。職場の人達は皆熱心であり、非常に明朗快活の上に親切であるのだからこのような二つとない立派な職場に勤めさせて戴いているという事は、私にとって斯大の恵みであり幸福であると思つてゐる。と同時に先生方のお蔭だと深く感謝してゐる。

(47)
四時半になると遅くなった手や顔を洗う。今から学校だが今では学校は私の心であり、光り輝くのだ。四時四十分になると自転車で順直に向う。学校で勉強中は、疲れも忘れて頑張る。四時四十分がもう少し

(48)で終る頃になると帰宅してからのプランを立てる。

学校の帰途寂しい耳が煩をなでる。教室の星は夜學生を励ますかめようにきらめいている。帰宅すると大時、望遠一日の疲れをなよすために風呂に入る。此の時の気持はまるで兵隊のようだ。臥場の学校での争が次々に頭によみがえる。

机に何うと十時。悲切った気持はどこへやら、今までカッと見無いていた大きな目は、寂れと安心感とで、まるでが鉛のように附き合う、と、もう夢を見ているような気持になる。これではいけないと、冷米で顔を洗うこと数度そうして勉強が出来る、あれも学びたい、これも学びたいと、一杯だが何といつて時育がない。数多くのつらくと進んでいる人の貴重な時間がある分のものならと思ふ事がしばしばある。又自分の死という事や死の月日がわかつていたら、あのうにむやみに貴重な時間を費やさないのではないかと思ふ、いつか虫の鳴き声も止んで、火の煙ほえが小さく聞こえる。奥に静かだ。幸福より以上に幸福だ。

実際計画はしても、実行という事になると非常にむづかしい。「自己に打ち勝つ」(To win myself)事は容易でない。計画よりもまず実行という事が僕の心に切実にこたえる。

十二時頃までがなはつて、ようやく目的達成した時の喜びは、意識のしようもない。ゲーテの言葉、
「なんじ、もし真に熱心ならば後と云わず今すぐこの瞬間にすべき事を務むべし」この教訓を心の奥底に深く刻み込んで翌日の苦戦にばく進しよう。夜學生は勞働によつて身を富め、學問によつて知識を広める。とかく一般社会では長年の生徒より程度が低いのかうに思えてゐるが、非常な認識不足だと思ふ。

真い勞働の後に勉めに励む進歩はむしろ驚りさえ持つてゐるのだ。向學心は炎のように燃え上つてゐるのだ。

私は町で、弟が産まれて百日ばかり過ぎた時、父はこの世を去つた。今でもときどき、おぼろける父の面影を察り求めて、寂れる時がある。そんな時は、本當にさびしい気持ちになる。祖母の健在な姿を見る時、何故私の父は……と考えるとき、涙が出る。

でも、私は今の生活をしめわせなもの、思っている。母は父の死以来、二十年前の今も一町三反余の耕地とたきかいながら、私達二人の生活を支えてくれた。私達には針も知れない。山程のそして毎日の労苦と涙でやり続けて戴いた事を思う時、母への感謝の念で胸が一杯になる。私は、登向は母と一緒に廻り事をしながら定時制高校に通っている。学校は私にとって心のオアシスである。又、一番楽しい日課の一つにもなっている。私が学校に行かなければ、ほんの少しで仕事の手がまわりがつくとか、明日の仕事が都合よくなると思つた時、又遠近所と同じように、船も購入したい、壁とりもしたい、種物も少々買ければ、と考える時仕事の手がまわり過ぎて学校に行くのが、おつくうに思われる事がある。私が学校に行けば、それだけ私の仕事の量に対して、母が道を斬ると考えると、母にすまない気がしてならない。と云つて学校を休んだり遅刻する事も、つらく思う。この事が私を迷わせて出る。

会社などに勤めて是時制に通う人達が、上校や同僚に冷たく見られるような気がして、気がおちるしなから学校に出て来るといふ事をよく聞くが、本當に嫌がるうと私にもうなずける。でも母は、この位の事は自分でやるから心配はいらない。自分の都合や、小さな事で学校をおるやかにしたり、暗く考えたりするのはいふじの無い事だからと云つて、学校へ追い出すようにしてくれる。そんな時は、有難さで胸がつまり、今の私は母を助けながら一生懸命勉強すればいいんだと思つて勇気を出す、学校に行つても費れている事など、居限りの出る事がある。目が開いていても先生の顔や黒板が、かすんで見えなく

なり、はつとしてどうしたんだろうと首をながら落着いて、目をうつめることも一度も二度ではない。この地を去つての六キロの悪道路を自転車で行くのも来ではない。雨の日や雪の日や寒い時、暑熱への試練だと思つて、雨や雪に逆らつて通つた事もある。泥まみれになつて自転車に輪がまわらなかつたり雪に滑つてふらふら、身を切るような北風に吹かれ指が冷くなつて自転車にブレーキがきかなくなつたりした事もある。こうして、曲りなりにも四年生となり、去年三月卒業を待つばかりの今は、本当に楽しく、授業を終えて家へ帰れば、八十二文になる宿料と母と兄が待つてゐる。途中、たまのおこずかいで菓子など買つて帰り、安い番茶でそれを淹べながら、父や学校の事など木入らずで話合ふのも楽しい事の一つです。私はこうした所から幸福を見つけ、明日への勇気と将来の希望への足がかりとしたいと考えてゐる。弟も中学三年生なので、よく手伝つてくれる。弟が学校から帰ると私が父で学校へ出かける。そんな事にも楽しいおかしさがあると思つて、母と顔を合せて笑ふこともある。たまの日曜日は学校へ行く時間の心配もなく、母や弟と三人で日一杯仕事ができ、これも楽しいことの一つである。でも一日中忙しくて、悪い目をこすりながら机に向つてゐる。弟をみる時、まだ小さいのに家中の者が弟の将来に望みをかけると同時に頼りにしてゐると思ふとかわいさうになる。

すがすがしい夕方、朝にえをやりながら、自然に冬かんで来る思案は、その日の反省となつたりして私に貴重な愉快な時間となる。思案に忙しんでいる時、正しい物の考え方や、ものの真理がわかつてくるように思われる。みだらない花の美しさや人々を乗しませる事も、私は知つた。そうした考えや希望は「働きながら学ぶ」と云ふことによつてより多く磨かれ、どんな困難も押切つて行ける精神を養つてくれる。そう考えると、むしろ昼間家に学校に通うよりも勉強のある事ではないかと思われて来て、初さながら学ぶ事を不幸だなどと思わないうちになつた。それと共に早く母を安心させ私達を育ててくたさつた労苦を休めさせて上げたいと思ふ。大きな希望や夢もいろいろあるが、真の幸福や喜びは家庭の中にこそあるのではないか。私も将来は仕事を愛する豊かな家庭人になりたいと思つてゐる。

取 場 に 対 す る 私 の 考 え //

(女) 幸 務 頁 十 八 文

私達の取場では余暇の善用として毎週二回ずつ、茶道、華道を習つています。それによつて、私達の生活は、一段の深さと、新鮮さが増しています。またそのあと友達と連れ立つて、屋上での楽しい誰ういや、スポーツ、殊に汗を出して爽する卓球は、又格別の楽しさです。これは、働いた後の疲れも、何処かへ、飛び散るかと思われ、私達を喜ばせてくれます。

以上の点においては、私の取場は、この上ない良い所であり、他の取場の人にとつては、幾望の限りでしょう。良い事も、悪い事も、相伴つてあるのが、世の常かは、知りませんが、次のような事は早く改善してほしいと考えます。その例を挙げて見ますと、ある課長達が私達に、書類を渡す時の態度です、初めてそういう態度に接した時、私は驚いてしまいました。わざわざ床の上に落したり、手に反動を付けて投げつけたりするのです。私は、バラバラになつた書類を一枚一枚そろえながら持つて行く時、つくづくなさけなくなつてしまひます。こんなひどいことをして、どこに利益があるのでしょうか。こんな事をして、自分が少しでも偉く見えるとでも思つてゐるのでしょうか。私にはこういうたゞ心遣は全ぜんわかりません。それより「こゝれ頼むね」と言つて、手から手へ渡して下さつたならば、どんなに温い人間的な感じを与え、他人の目にも良い事がわかりません。また、私達を呼ぶとき「おいおい」と言つて、なにぞれると何んだか、自分を卑下されてゐるようで、なさけなくなつてしまひます。これは必ずしも私のつゝのみがみしではないと考えます。上役の方々も初めから苦勞なく、係長、課長の椅子に座つた方はかりではないでしょう。幼い頃から苦勞なし、何く年少者の感ずる氣持も身をもつて、経験された方も、数多くあらうと思ひます。

私達も、いつまでも子供では有りません。じつとこうえてはいるものの、そんな、おとなを、それ以上
に軽べつしたくありません。私達が、おとなのする事を学ばうに、おとなも又私達子供の持つてゐる清
らかなものをさとして、自分の生活に、コブラスしてゆく事も必要ではないでしようか。その上で、
子供を指導したならば、子供も、素直に、明るい気分で、朗らかに、自分の仕事に専心いたします。
最後に、理想の職場として、課長、部長の偉い方にも、私達年少者が、むつと気象に、何でも、打明
けられ、自分の差支に、左右される事なく、個人の問題にでも、理解と、愛情をむつて、何かと指導し
て頂きたいと思ひます。

昼休みの過ごし方について

(男) 菊 你 エ 十 七 オ

私は去年の三月、中学校を卒業して五月に就職し、社会生活に入つた。連日一週間を續けて楽しかつた
事は沢山あるが、不愉快だった事は昼休みの過ごし方だけである。

店員約二十人中男子が六人いて、昼休みには庭球、ボールで野球をしたり、自転車に乗つて散歩したり、
皆と雑談したりする。これらはよい遊びの部類だが、更けない本を読んだり、時にはパチンコ屋へ行く
こともある。おいにくパチンコ屋に恵まれているので、週に二回から三回行く時もある。今年の春、前
等学校を卒業したまじめな青年が入つた。ある日の昼休みに機嫌よく散歩に行つたが、パチンコ屋へ
入つたので驚いていた。彼も買つてはじけたが損をした。パチンコは確かに面白い。けれど私は十八才
未満だし、行くたびに一生懸命働いて得た金全部を捨てて行く。お金も時間も一途無駄に費つてしま
う結果となる。

私は夜学へ行つてゐるので、昼休みを利用して勉強をしようと思うが、仲間はずれにされるような気が
する。そうかと思つてみんなのまねをしてゐるとだんく不良化して行く。それで誰にも楽しくすごせ

る娯楽はないものかと何處か考えた。読書、レコードコンサート、運動などいろいろあるが、野球は女子には過ぎず道具は高くつき、広い場所も必要なのでだめ。こんなふうに考えてゆくと卓球が一番適しているように思われる。卓球は女性的でつまらないと云う人もいるが、日本人には適当な運動であると思う。その証拠には日本の卓球の選手は国際試合で相当良い成績をおさめている。

私の働いている店の昼休みは四十五分あり、昼食を十五分とみて三十分のこる。二日で一時間、一か月を十五時間にもなる。一時は金なり、と云うことわざがあるが、三十分を有効にすごしてむ、つまりな

くすごしてむ時は同じに過ぎて行く。

ところで他の工場の昼休みはどうかと質問になるので、クラス十人の友達について個人調査をした。大体の調査では、大規模の工場では娯楽設備が整っていて、昼休みを有効に使っているが、小規模の工場ではこの反対であることがわかった。又個人商店では昼休みも一定していないところが多く、従つて昼休みはつまらないと云う人の方が多かった。次に個人の例をあげてみよう。

S君の場合は鉄工所に勤めていて昼休みは野球をする。N君は大きな紙巻工場に働いていて、工場の業団に入っている。昼休みには読書習を行い、工場の宴会や、近所のお祭りがあると余興に出張するそうで、うらやましくなる。木工場に勤めているK君は卓球やキマツボールをするが、時間が短い上に娯楽費の数が多かった。一度にみんなとするので面白くない。もう一人のK君の職場は小さな鉄工所で、彼はクラスを二番の成績だった人なので昼休みに新聞や本を読んでいると、「生意気だ」とおとなの人に云われるので、みんなとくだらない雑談をしなければならぬ。K君は勉強が一番好きで、仕事はつまらない。昼休みなんかなくてむい、と言っていた。M君は味噌醤油の注文とりや配運をしているが昼休みは全然ない。

(53) さて私達の職場ではどうしたらよいか、私の考えを一部の人々に話したが、おそらく全部の人が賛成するだろう。娯楽設備について私から直接奥さんに話して見たが、いゝ返事はしなかった。三ヶ月後にま

た、叱り小る覚悟で聞いてみたう、「みんなの希望通り」にさせてやりたけれど、主人に聞かなくてはわ
 からない」と云う奥さんの返事。

今度は主人の親戚のいい所、同じような事を話してみたら「お前は専公にまわっているのだから、娯楽設備
 などいるかし」と叱り小、金銭聞き入れてくれな。

みんなで昼休みを楽しくすごしている夢を見た事があつたが、いつになつたらあの夢のように誰か彼衆
 しく愉快に毎日の生活を送る事ができるようになるのだろうか。一日も早く夢が実現されるよう希望する。

職場生活二年間

(男) 愛 報 局 勤 務 十 二 ヶ 月

私は中学校を卒業してすぐ就職し、二年余りになります。私は今まで「仕事を楽しいものにした」とも
 ットーのものと努力してきました。本当のところ、私は中学校時代から余り電気関係には、興味がなく、
 又無知でした。今でも、それに近いのですが、こんな私が通信という仕事に落着いたのですから皮肉な
 わりです。それゆゑ苦労しました。

私はまず何より、好きではないが嫌いでもない。この仕事が好きになるよう努力しなければならな
 いと考える。その為には派手なリード、オプ、マシとしての先輩と気の合う友達を得る事が必要と思い、その
 方に力を入れました。これには失敗もありました。苟に勤めて一ヵ月位過ぎても、苟に勤めての感想文は
 の書きがあつたので、私も所信を書いて出しましたが、その中から「友達」について述べ、或る先輩の個
 人攻撃をしたことから、意外な批判を喰んだというような行き過ぎもありましたが、今では人と交際す
 ることのへたな私は、立派な先輩が見つかりました。そして仕事について、リードをしてくれるの
 で、仕事に対する親しむ倍加し、楽しく、元気に働いております。

次に来たのは学力の問題です。私は中学校卒業なので、職場でひげ目を感ずるのは極し切小ません。

私は一度決めたこの仕事を捨てる気は毛頭ありません。むしろ全力を盡して、又誇りをわけて前進して行くつもりです。そのためには常に高いものを求めなければなりませんし、そのチャンスもありません。これが、これは、いつも高校卒業程度以上の学力を必要とします。これが今私の直面している課題です。ここで私は一つの教訓を得ました。「人生は試験の連続であり、その試験に勝つ強い人にならねばならぬ」と。この難関を突破する為、去年夜学に入るべく準備して入試を待ったのです。不幸母が急死したので、その夢は消えてしまいました。しかし、私は自己を信じ、チャンスを持ちました。ついにその時が来ました。これは一高の通信教育です。この五月私は一高の通信教育生として出発しました。

そして今、高校卒業程度の学力を付けるために勉強しています。

オミの問題は家庭の事です。私達通信をする者の勤務は全く複雑です。私の家族は父と弟と私と、全くの男三人の生活です。父は日産、弟は小学三年と二人共時間的には普通な生活をしている中に、おれは替制という勤務なので、私は、掃除や洗濯など、家庭の事はいろいろできます。但し、朝飯だけは父が起きて作って下さいます。でも問題はこの辺にありです。つまり取務、家庭、独学の三重生活が成り立つか。ということですが、現にこんな生活をしている私を、果して世間の人が見たらどんな風に見えるだろうと考えることが時々あります。

地理的、文化的に泉の中間に位置するこの所には、勉強なんか。という考えがまだ一掃に根強く残っています。反面世間様は親切です。弟が一人つくねんど、父や私の帰りを待つてゐる時、隣近所の人達が親切に茶を世話してくれます。こんな時、母の死と可愛い弟の元気な姿を思い出します。このような世間に対する交際が私には苦痛です。人一倍交際のへたな私には無理ありませんが、これは時が解決するでしょう。へても今は随分上手になりました。

(55)

以上三つの事柄について述べましたが、私の目標は、偉い役人になろうとか、有名な人になろうとかいうのではなく、文明国としての日本の立派な国民になることです。つまり時代の進歩とともに歩むことの

(56) をさる人間になることです。

私達は、まだ若く、修練期でもあり、又年頃でもあります。年頃だという事は、人によつては危険な時期でもありましょう。但し私には一つの勵みになります。というのは、立派な人間になつて立派なお嫁さんを貰うんだ、という考えに立つてゐるからです。

私はこうしてミシンを買つた。

(女)紡績工 十七歳

卒業式をすませて四日目に両親、弟妹として仲良しの友達と別れ、私は一人淋しく、不安な氣に大ま
い希望を持ち大雨の中を近所の人々に送られ旅立つたのである。うちには祖母を始め、小さい弟まで
肉親の始めての旅立ちなので、大雨に夏けない位の涙を流して送つて呉れた。客が食ふので、雨降り
なのに雨靴一足もないので古い運動靴をはいて出た。私が乗物に窮いたため、途中一泊して足進の工場に
入社した。一緒に入社したのは二百人位であつた。どの人を見てか新しいようなセーラー服に新しい靴
をはいてよい姿であつた。六年生の時に作つてもらった服に、一年前に買った靴をはいてゐる私は、自
分のはじめの姿にすぐ涙ぐんでしまつた。急に帰りたいなつたが、こんな事でくじけたら、一生、社会
の荒波をこえる資格がないと思ひ、勇氣を出した。工場のいろいろな注意事項をきいてから、知らない同
郷の人と新築の一室に入つた。これからバベンに書きつくせぬ苦勞が覚いたのである。こうしてペンを
取り墨去をふり返つて見ると目がだんだんかすみ、字が見えなくなつてくる。私がさげす来たトラシク
の中には、夏服一枚、シャツ一枚、ワンピース一枚、仕事着一着で着て来たセーラー服のほか冬服は一
着もないのであつた。日用品を賣う金として千五百円、父がどこかを借りて来てくれた。千五百円とい
えは多いように思われるかわしれないが、洗面道具と草履を買つてゐるとこずのいはない位であつた。け
れと初めが大切なのだと思ひ必需品だけ買ひ、千円残した。そして何日かたち初めて働いたお金をもらう

日が来た。十六日出勤で千三百六十円あつた。すぐ貯金と思い千円貯金し、残り三百円は父がらむらつたお金の千円で生活する事に予算を立てた。日毎に暑くなつてきた。私にとつて一番困つた事は作業衣であつた。入社前に作つた服は木綿の縞の長袖であつたので汗がよく出るので、仕事かたやすぐでさなのので、どうしても半袖の服が欲しいので、人絹のべらべらの一着百五十円のを仕方なしに買った。この服を着ると汗が出てからにだすがすいて見え、着ていゝうか着ていないのかわからぬ位であつた。ある時、あなたは服を着て居るのかと言われ、まづかになつた事もある。仕事かう帰るとすぐ服を洗う。天気がいよいよと残い爪の為、翌朝にはき水に乾くが雨の日は喉をなやました。着る事はどうにかできたけれど、又悲しい事が起つたのである。五月三十一日に父が買傷したからすぐ帰水と電話。電報があり帰宅して一週ばかり欠勤した。給料日には二千円に足りなかつたのである。貯金をしてミシンを、そして妹に服を買つてやらなければ、といろいろ考えた。それからは密に変つた事もなく思つたより、よく出勤でき、金、運動会等又その他の月も衣類を送つてやつた。いつも喜んで礼状をくれた。それから又困つた事は買喰いの事である。パン、アメ、ケーキ等友達に競争のように毎日よく食べた。月にふつ

う五六百円で、八百円から千円位買喰ひしてゐる人むよく見かけた。

(57)
私の頼は偉にミシンと妹の事が離れず月に百五十円以下に予算を決めた。これ以上使わないよう努めた。人が三十円使う時は十円位にして貯金の方へ頭を働かせた。少しでも買わないようにすると、白眼でよくにらまれた。又「欲な欲なし」に「ざり」に「ざり」と言い相手にしてくれなかつた。夜裏床に入つてから家が貧乏でなかつたり……とふとんをかぶつて泣いた。社会生活のくるしさをしめしめと味つた。時には上役の人に相談しようかと思ひ、上役の人を見る度に口をむじもじ動かしたけれど、とうとう言う勇気が出なかつた。時には今まで、はりつめてきた心をゆるめようかと思つたけれど、くりけてはなうぬと暮る親の声、懐かしいふるさとから腹に乘つて来て私の耳元でささやいてゐるし、又弟妹達はボロを着ても学校で上位の成績を占め家庭に帰つては、小さい手に豆を出して、痛いのをじつとがまんして土

と共に仲良く一生懸命働いている姿が目前に浮かぶ。姉さん買けるは買けるなしとはげます可愛い戸が開
こえ、又勇氣を出す事が度々あった。それからまたまた困難な事があった。それは映画である。日曜日
と言えば皆モーニングショウに出かけて寄席は本当に静かである。初めは行こうとささつてくれただけ小
ど、一度も行かないので、誰も相手をしてくれなくなつた。茅味達を考えると自分だけ楽しくする事が
できない。こうして私はだんだん孤獨を好むようになった。私の一番の友はラジオで、眠つたり踊つたり
して楽しむ。映画を見るより本を買つて読んでいる。今までに一度もお金を出して行つた事はない。
私は身長一四三、五センチ、体重四二キロ、胸囲七二センチの小さいがらにでであり、一ヵ月位ずつと注射を
して欠勤しなかつたことは嬉しい。月に二十五圓位の給料で、家に送つた上でよくこんなに貯金が
たまつた事と自分ながら感心する。そして、ついにやつとミッシン、を一回押して買う事ができた。こう
してミッシンを買つたら、皆は、にぎりに言わなくなり、私わあななりううにしながらはなれぬと
言う者も出て来た。ここに入社してから丸一年の生活をこのように反省して見るとまた、新しい希望が
湧いて来る。これまではお茶を半年、お花を半年習つたが今は夜間部で評教学校へ通いながら相変らず
働いている。

一通信生の希望

（女）事 形 質 十 六 才

「通信教育が何だ。そんなものはやうなくてむい。それよりかすは評教でも習つた方がいい。」

祖父は、かんかんになつて怒っている。母も「そんなもののやうなくてむい、いじやな、わ」と言つて、私
の云つた事は、ちつとも聞いてくれない。「皆が反対するのなら、悪化をも覚悟して見せる。そして、ち
やんぴした、修業証書でもとつて皆に見せてやる」と私は、自分に云つて聞かせた。数日後に、私は、
K通信教育を授け始めた。毎月の、我らがのこすかいを学費として、毎夜毎夜、家人が寝てから本をひ

あげた。起きてゐる間は本をひらげると、あまりいい顔をしてくれない。時には友達に映画を誘われて行くこともたまになつた事は一回や二回ではない。或る夜などは昼のつかひの爲に本を開いたまま、うたた寝する時さえあつた。雪の降る夜は寒さのためにペンをにぎる事もできない。それから一ヶ月、二ヶ月、三ヶ月とたつうちに母は、何とも云わなくなつた。そればかりではない、私が、本を開いてゐる間は、母は決して寝ないで傍で起きていてくれる。私は、とてもうれしくてたまらない。母が、これだけ理解してくれたいと思つと、これからはむづかひと一生懸命やろうと思つた。しかし何と云つても高等学校へ行つてゐる友人に追いついて行くことはできない。私はそれにとめておくやうに思つた。何とかして友達に追いついて行こうとした。だが、先生から直接學び、参考書を手元において勉強してゐる友達にくらべ、毎月のこずかいを節約して、學費をやつとほかかう自分を思うと、あきらめるより仕方がなかつた。自分なんが勉強してもまだ人間だと思つた事があった。その時に思ひ出したのが、下先生の別れる時に教えたくれたい言葉で「苦しい時に進歩あり」と云うのであつた。「何くそ、この位でまけるものか」と心の中で叫び、ゆるむ心のひきを、きつく、きつく、ひきしめた。

一期が終り、二期に入り、やがて二期も終りに近づく頃になると、物理、数学等は特にむずかしく、その他の、日本語、漢文等も全然わからなくなつてきた。しかし、友達に買けるのがくやしさに、一心になつて、本を読んだ。この頃では、一人歩きの勉強になれて来て、練習問題等は、他人の力を借りずに済むようになつて来た。まもなく、修業試験も近ずいて来た。この試験も無事に終ると國家試験が待つてゐる。これから、身心共に、ひきしめて、いかなければならない。そして、目ざす目標に向つて一歩一歩進んで行くのだ。

勉強するわけ

高校へ進学しようか、就職しようか、と色々を考えた末、いつか二年を過ぎてしまっている。そして今、やっぱりほくは木 師になつてよかつたと思つてゐる。「高校なんかへ進むよりかは何か技術系身につけた方が結局は身のためだ」と言つてきかされた父の言葉が正しかつたように思える。それは今度高校を卒業してほく達の工場に入つてきた人をみて一層強く感じる。ほくが働いてゐる木型工場はみんなで十一人の小さな町工場で、主人初め皆親切で一番年下のほくにはよく教えてくれるが、やっぱりつらい事も沢山ある。仕事が終わらない時や失敗した時など本当に泣きたい位だ。今度来た高校卒の人はほくにこぼしてゐたが、もう少しこちらの身になつて、教えてくれる所は教えてくれるなうは、こんな失敗はですにすむ所なのに、「結局これを取んね」なんだね」といつて取んねを奪つてやるようなことを云つてゐたが、ほくもまんざらこの人の気持ちがわからないうでなく、しかしそれだからといつてそんなにまで取んね性と言つてしまふべきものでもないと思つてゐる。

二年間をふりがへつてみると、ほくもそんな事を考えたことが一度や二度はあつた。しかし一番年下の事はできるやうになつた。今ではほくがこの工場で欠けたらさつそく困つてしまふだろうと思つた位に、仕事の間では他の取んねと一緒に一生懸命にやつてゐる。今度学校を出てきた人は年令はほくより上で頭もいいが、仕事のことではほくが先輩で教えてゐる。

しかしほくには大きな悩みがある。それは学校を出ていないので教養が低いと世間の人から罵られるという事である。自分では学校を出ていなくてお人並のことは知つてゐるつもりであり、又知ろうと努力しており、一般社会の問題や数学、英語などは少しなりとも追ひつこうと思つて一生懸命に勉強してゐる。

夜間の定時制高校なりとも行けばこんなことは問題ないかもしれないが、今のほくにはそれができない。それは学校へ行くために早起して帰るその時間が、惜しまれるからである。皆んなと一緒に仕事をして

にて自分だけが四時になると終つて帰れば仕事にも具合が悪く、またそれだけ自分の技術が進めるのが惜しいからである。それには自分だけが人に迷惑をかけるで学問しているということには、学校を出ていない取人さんから見れば、きつといふ気持ちばかりではないだろうと、考えられることも理由の一つである。それと学校を出た人と同じような知識を得るために自分で勉強して行ふと固く決心したのである。取人の仕事をみていると実にきついので、早くも早くしかつて商賣いが敷く、一つ一つが果々とできていく。しかし家に帰つてよく考へてみると、何かそれよりわ一步進んだ仕事で勉強によつてできるのではなかつたかと思つた。勉強ばかりで、わつと立つて立派な取人になることができて確信した。そればかり上りの取人は主人から教へられただけしか知らず、その通りをやつて通して行っているだけである。それに加えて自分で現図のことや銅物のことを知り、また機械加工の事を研究していたならば、わつと確かな木型を作ることができると思つた。また内周を計る時は、まず床に現す面を描いてそれを糸で通して長さを決めているが、これは内周の公式 $2\pi r$ を使えばすぐにできることである。またいつかこれは三角を使えば、わけなくできるのだが、と学校出の人が云つていたが、さてその三角を忘れているというので何にもなうなかつた。それではよくはどんな時にでもすぐ役に立つように三角をわ何でも勉強してやろうと思つた。学問と技術と一語に身につけようと決心した。少しずつでもいゝからと思つてやつていく。しかし一日の仕事を終り家に帰つてから勉強するということにはなかなかつらいものだ。しかし大きな希望があるのでじつとこらえている。勉強した事がすぐには役に立ちはたさそうもないが、一つの教養と思つて一生懸命にやることにしている。

憎くがこんなに勉強しておかなければと思ふのはわう一つ目的がある。

それはいつか時期がきたら、自分で商売をやつてみるという大きな希望である。主人から色々話をきくが、今日、自分で経営している大部分の人は皆弟子入りから年期を勤め終えて、並立して商売をやつていく人だとのこと。しかしやつぱり学校出の人がこぼしていたように取人気質というものの中に育つ

てきてゐるので、どうしてわたしの根性が現れてくるようである。よくが経営者になつて人を扱うふうになつて、そんな取人根性を出さず、また陰で教養の低い人だと云はれたりしないような立派な経営者となるために、今のうちから勉強しておこうと考へるのがある。人間は一生が勉強だというが、よくわ一生いゝつてこのことをやり通してみたいと考へてゐる。

健康が第一

(男) 養 成・工 十 六 文

私はこの工場に勤める様になつてから約一年四ヶ月になる。この会社に入る前は夜学に行くつもりで一生果敢に勉強した。そして会社を突習場として学校で工業の勉強をしたが大変良いと思つた。しかし入社試験に合格した時レントゲンの結果があまり良くないから学校を一年のばしたかどうかと云はれた。それでどうしようかとまよつた。しかし私は技能者養成工で会社でも学科を教えてくれるという事を知つた時、私は夜学をきつぱりとあきらめた。なぜならば私のからだでは会社と、学校の勉強は両立しないと思つたからだ。そしてしばらくの間はなにわかも忘れて大変楽しい日をすごした。

しかし昨年十二月レントゲンの同接撮影の結果がよくないから又撮り直しをしろという事をきいた。しかしその時は同接撮影であるためにあまりはつきりした事はわからなかつた。別に気にしないであつた。

それに「お前みたいないいかうだをして肺病なんかなるわのか」と云つて力づけてくれた指導員もいた。しかし同接撮影で要注意だと云わされた。そして運動は禁ぜられ、栄養を取るようになつた。

さつそく家にかゝつて話をしたら母は「そんなこと気にすることはない。うちは先祖代々肺病になつたものは一人だつてない」と、云つて、なるべく私の氣を落させまいとした。

そしてさつそくその日から牛乳をとつてくれた。私は専注意になつて一番いやだと思つた事は大好きな羊乳その他のスポーツがでなくなつたことをあつた。しかし自分のからだのためと思つて、がまんし

てやらないうでいた。そのせいか二月になつて要注意Aとなり少し良くなった。
今ふり返つて見ると、初めの半年は自分の連続であつたと思う。

本社の会社は研討会社であるためにこまかい機械をいぢるのが好きだなどと言つて入社した。だが水もが
そうだったと思う。しかし入社してきて私達の予想は完全にくつがえされた。

こまかいものどころか「マズリかけ」「すり合せ」「はつり作業」などと殺める仕事ばかりだった。そして
体育の時間は水泳、休み時間は野球、卓球、ボールと休みなく動き続けた。そういう無理な運動
がからだをこわす原因となつたと思う。そこで私は希望する。これから社会人として第一歩をふみ出す
人は一年間へその仕事に完全になれるまで一は決して無理な運動をしないをほしい。そして次に、もし
不幸にして私みたいにな人が出た場合はそのまわりの人々は要注意などと云う。言葉はその人の前を口に
しないをほしいと云うことである。

特に肺病などは気の持ちようがあると思う。私などは何かにつけて要注意は引込んでいゝるなどと云われる。
この間の食事の時間のことである。私はいつか用心のために「はし」をわつて来て会社においておく。
ある人が二回ばかり「はし」を忘れて来て私のをかりた事がある。

その時その人は「お水もあまり要注意のはしをかりたくはないんだけど」と云つた。私は「なにをい
思つた。もう少しするまつかになつておこる所であつた。しかし私がおこる所はどまりの人達に
かへつて私はからかわれるような気がして私は笑つてごまかしてしまつた。二三日前にある人に云はれ
た。「お前みたいになかうでよく会社に入れたなし、その時私は腕と頭を痛さして、ここと、こことと
買われて入つたのだ、などと云つてごまかしておいたが、あまり悪い気持はしなかつた。」

私はそういう事をあまり気にしない方がいいやうなものの、もしそんなことを気にする人であつた
ならば、通常の病氣も悪化する場合が少なくないと思う。次に体育の時間はあまりはげしい運動はさせな
いではしいと思う。この間も少しはげしい運動をした時私が誰に云うとむなく要注意のもとを作つてい

るようだと云つたら先生が変な顔をして私の方をじつと見ていた。以上は体験談である。

次に取場の事であるが、私達が一番手下であるためか取場の掃除といういつも私達である。

その場合取場の人達は自分の使つた道具や機械などを、そのたびに片づけたりせうじしたりして、水は取場はいつもきれいになつており、私達も貴重な時間をつぶさないですむと思う。これは取場の人達に希望する。

次に指導員の方に希望する。実験の時間はもう少し根本からくわしく教えてもらいたいと思う。指導員の方も自分の仕事をしながら教えるのであるからなかなか大変だと思ふがなるべく、どうしてもらいたい。これは学科の時間にも云えることである。先生の中で読めば(本を)わかるなどと云つて教える先生がある。

やはり働きながら学ぶという限られた時間であるが、ある程度はやむを得ないと思ふが、もう少し皆になつてくるといふように説明してほしい。

それ以外今更で私が一番こまつていることは英語、数学の根本が全然わかつていないと云うことである。中学校の時一生懸命やうなかつたのが原因であると思ふ。

それで私は改めて初歩からやり直さうと決心し、それを実行し始めた。そして私はこのこまつている問題を解決しようと努力している。

働きつゝ

(女)紡織工 十七 文

「いつちやん学校へ行くでしょ。」と人に云われると、始めのうちはふつと悲しくなつて涙ぐんだ私だつたが、卒業が真近くなり、此の賢明が度かざるにつれて、だんだん腹立たしい気持ちになつて来て、大勢を出したくなつた私だつた。

「何も学校へなんか行かんたつて、べんきようでさるんだ。自分の信念さえしつかり持つていたら、
とこの時は、自分自身をなくさめろために、何處も働さながらべんきようするんだ。とつぶやいた。
母は何とも云わなかつた。遠いビルマで戦死した父のいない家の家計では、母がなんとも云わなくなつて、進学などできないことはわかつていた。

卒業近くなつて、母はなんとも云わず、私に口にすることはいやだった。「学校へ行けないんなら、工場へ行くより道はない。工場でも、近くに高校があつて定時刻へ行ける工場へ行きたい」とは思いつく。又「何か奇せきがおきて、学校へ行けるようになりたい」とも思つてみれば、すぐ現実にかえり、落たんした。

「お母ちやあ、あのう、あのう」と卒業式もあと一月というころになつて、今夜こそと思つてはきり出すのだが、土くさい木の汁百姓まるだしの母の顔を見ると、何とも云えなくなつてしまふ。「何よ」と云つて、初めは私の顔を見るが、すぐ眼をそらす母、母は私が何を云おうとしているのか、わかつてゐるのだ。こんなせぶりの母を見ると、「あのう」で終つてしまひ、他の話を持ち出してしまふ。母は勝氣な性分だから、私の就服についてお知人におねがいして歩いたり、口に出してあつた水云わなかつた。しづし心では絶えず考へていたにちがひない。私に「どうにかなる。働いてお金を得て、べんきようでされば良いんだ。へたなことを言いて、母を心配させまい」という気持ちと、「学校へ行けない」と云う自分だけの秘めた絶望とから、少しやけぎみになつた気持ちとで、しらん顔をしてゐた。

どうにかなるもの、結局、学校の方の計らいで、〇〇紡行まとなつた。母は、私が電車にのり込み、他郷へ旅立つ時でも、「元気で」とも「しつかり働いて」とも云はないでわが水た。でも、母のあの眼は何もかも語つてく水る。何も云つてく水ない方が私も母に明るい顔を見せられ水るため、母都合だった。故郷をはなれる前の夜は、一時から二時まで、一時間と云うもの、時計のカツチンカツチンを三千六百勘定して考へた私だった。「働さながら勉強するんだ。進学した人に負けないように」と……

でも、入社した工場生活は、どんなに思っていたよりちがつていたが、

勉強するにも本がない。たゞる人指導者がない。はりつめた気持ちがだんだんゆるんで来て絶望へ……
「だめだ、だめだ、結局、マエは文工なんだ」と思うと「人にめいわくをかけない人間になる。毎日日記をつけること。給料の半分は家へ送金してやること」の個性がきの紙をひきむしつて泣いた。

自分へ、暗い絶望の気持ちでいると、何もかもが面白くなくなる。人に不愛想になる。寮の先生とか、職場の上役の人達を自分で、悪い人間に作りあげてにくむようになる。そして絶えず「勉強したい。だけ……」と思つて暮らしていた。

周囲の人達が「いつかやんこのころどうかしている」と、話かい手をさしめにくれるのに、私は、かたく自身をしぼりくくつてしまつて、強情に自分を苦しめていた。「学校へ行くばかりが、机に向つて勉強するばかりが、真の勉強ではない」と人は云つてくれた。しかし、今の状態から考えて、勉強するには結局、学校らしい学校で勉強しなくては、自分の身につかないと考えた。「寮を、勉強したいと思つて生返している。それが勉強なんだ」と云はれても、今の生活では満足できなかった。

今のところは満足して……。そして自分の希望は果せられるようにがんばつてゐる。母は、あのこの変化を何とも云われない。しかし鉛筆をなめなめ書いたらしい手紙には、おでは云わなかつた。「むりをしないように……」勉強する方がいいが、高気にならんように……とかいてある。母の手が目に落ちる。

学期末のテストも終つた。夏休みが来る。夏休みになつたら、思うぞんぶん、自分のやりたいことをするんだ。「本を読めるだけ読んでやろう。それから新聞の政治面も、おつとくわしく読んでやろう。文もかけるだけつくんだ。夏休みになつたら……」夏休みになつたら……

私はかりでなく、人間だれもが、新しいものの、次に来るものに大きなのどきをかけ、期待をかけ、夢みて、はりきつて生活する所に、生きるたのしみ、生きる価値が在りて来るのだと、つくづく思う此頃だ。

私は学校へ、友達のある人は洋裁に、ある人はお茶の花をなういに――。一日の作業が終わって誰かが、高い教養を身につけ、よい社会人となるために学ぶ姿を見る時、自分が、やつと、こさつたこいまでをふりかえる時、何事も一心になつて、実行にうつして見ることをだに思う。「誰にでも方になつてくさうな人に体あたりで自分の考へていることを話し、相談しに行つて、自分を、自分の直むべき道を兩拓するんだ」と深く思う。

「青年よ大志をいだけしの尊い言葉を深くかみしめて。」――

私の希望

(女) 理 志 師 十 七 才

ここに述べる私の希望はまたむなしく種彦にかき消されてしまふ事を思ひながら淋しく筆をとりました。

幼く少女少女の中には向学心に燃え、又はんとうに実行でさる人も決して少くありません。私も向学心に燃えていました。が家庭の事情で進学できず、苦學する事を唯一の樂しめとした。で生活のための取業についたものの、社会は、私達の思つたような氣易いものではありませんでした。朝早くから、夜遅く床につくまで働さ、お風呂へ行つて一息するのがやつと、後はぐつたりとなつて、なんの勉強などできませう。人格や、教養は決して、学問からとは、言えませんが、社会は常に進歩しています。私達、幼く少女少女にも、もう少し、自由時間というものが与えられ、社会人として取しくない知識を、身につけたいのです。毎日労働にのみ費して過ぎてゆく日々を思う時、我々の運命が全りにむき直り、又哀れになつて来ます。

(67)

ああ私達はつまらない、金ある人のみが学校へ行き、機会ある人のみが苦學する、私達はそれさえできない、こうした余りにも差の激しい運命を思う時、堪えようとしてむき直り、悲しみがあふれるのです。

私はこう国会へ希望します。国は私達のためによりよい法律を作り、取締りをわけていかにし、重責者は、何々の罰に処するなど、とにかく私達の教育上よい力となつていただきたいのです。こゝが私達心盛からほどほしる、なくてはなりません。

私達のこうした希望が一日も早く実現さるたり、私達は、どんなに喜んで、そして年々事を喜びと感ずるでしょう。

どうかどうか、お願いです。国を司る方々よ、こうした私達幼く年少者のよりよき力となり、協力して下さるよう希望します。私はもう一度、叶ふ、こゝらの意見が、眞実にヒリ上げられこゝに協力して下さるようお待ちします。

間違つた就職第一歩

(文) 紡績工 十 大 友

私が現在勤めている工場は採用試験を受けたのは、昨年の二月。そして「採用する」という通知を受け取つたが、半業式であつたかといふある日家へ帰ると「採用一時取消」といふハガキが来ていた。私の両親はもとより、私はたまたまほう然とした。その翌日学校へ行くと、連絡員がきて「今紡績は不況で、従業員をやつているが、もう少しすれば希望退職でたくさん退社するので、十月頃になつたら入社できる。それまで待つても良いし勤める所があつたら勤めて欲しい。又のち再通知するが……」と言つて帰つていつた。私は家へ帰り相談したが、家では「それまで待つておけ、家もこの頃りの金だから……」と言う。卒業を待ち、母は安定所へ行つたりいろいろ就職口を探していたが、同じ村の人に以前、名古屋の毛織工場に勤めていたという人が私の家へやつて来て「そこへ行つて働く気はないか」と言い、その工場の内容をいろいろ説明した。それによると、近くには定時制高校もあつて、寄宿舎では、お花や洋裁も教えてくれるし、自分のためになるから……それらを聞いて私の両親も安心したのである。

行くようにすゝめ、四月五日にその工場へ入社する事になつた。私は心細さのあまり、そのおばさん「その工場へは何人仕入社するんですの」と聞くと「ことし卒業した人びと二人であなたと三人です。でもことしは不景気で、この工場の人を雇用しないんですが、毛織の方です。今少し景気が良いですから全部で七人仕入社します」と答えた。

それで私も少しは安心した。―― 出発する前の日は父も母も「初めて働きに出るんだからお祝ひしてやらせよ」と言つて赤飯をたいてくれた。このように家の人から喜びの言葉をかけられても、何故か私の心は絶えず動揺した。(安定所を通さない)―― という言葉……先生も言つておられ「安定所を通さない工場は、決して明るく楽しく働ける所ではない」と。私はその説まんじりともしないで考えた。行くべきか、行かぬべきか、至行くべきだ。今になつて迷つても仕方はない、そうだ家の経済的援助のために又自分の将来何らかの心の励みになる体験のために、私は決めた。幸い、近くに足時計高校もあるという事だし、一生懸命勉強しよう。―― 人間は死ぬるで勉強だ―― 私は翌日の夜行で懐しい故郷を後に一路名古屋へと旅立つた。六日早朝その工場へついたが、まず感じた事は小さな工場だなあと思つた。それは黒い板べに囲まれた建物だが、建物というより、むしろおやしきといつた方がふさわしいかも知れない。私はおばさんに従つて門を入り、飛石づたいにおもむろに右へ行つた。この工場はおやしき工場に改竄したらしい。門を入つてすぐ壁の左右が取場になつていて女の人が忙しそうに働いていた。道のつき当りが事務所それより右へ曲つて社長の家、その吹雪場を通つて食堂、面会室、女子寄宿舎となつてゐる。私はその面会室へ通され社長に紹介された。その面会室には、もう三人来ていた。未知の人であつても、なぜか私はもう前から知つていたような親しさを覚えた。見かわす目と目し、せんと微笑をもつてゐる。私達がこんな事をしている間にもすぐおばさんと社長は何事か打合せをし、おばさんが私に「まあ工場の中を一週り見てきましよう」と言つて促したので、私もこれから毎日行かなければならない職場へ行つた。その日はつかひでゐるからというので荷物の整理やお部屋を

きめる事などで過ぎした。私が入つたへでは、講堂で会つた。三人とも全帯で十人、新入者の残り四人は、私の隣のへやだつた。寄宿舎といつても全部で三室。全従業員わづか三十人余り、翌日から出勤七時に現場へつぎ十二時に昼食、三十分間休けい、それから又七時まで働く。十二時間労働なので、宿舎へ帰つてからは何もする元気もない。並くに定時刻高校もあるという話だつたが何もない……来る時の話とぜんぜん違う。おばさんは、おれをつれてきた日の夜行で帰つて行つた。くる時は何も荷物がない。つたのに帰る時はたくさん荷物であつた。工場の人の話では、いつも新入者をつれてくる毎に、おれとしてこゝで横つてゐる友物を我々がかりつていくという話であつた。何の变化も面白味もない生活を、ふうやく二カ月通したある日、家から急に電報がきた「急用で帰れ」とその日の中に荷造りをすませ、故郷へ帰つて来た。家では父も母も優しく私をもててくれた。父は「おれ達の寺落ちだつた。もう少しやつくり考えてやるんだつたなし」と言つた。母も又「お前が前から希望してゐた工場からさういふハダキがきてこの二十一日には行けるさうだ」といつたので私はとび立つ程うれしがつた。しかし結構女工というとなぜが世間の人は整へつ目の目で見る。各工場にいる時もさうだつた。あつと夏物になると「女工さん」「女工さん」と用もないのに呼ぶ人もゐる。その人の人格は職業で区別をさるにあらうか。立派な服を着ていくも教養が高いとは言えない。又資本家でも、規則に反した経歴をしてゐるのは決して憚いとも思われないし、又尊敬もしない。

サエという仕事は何れ輕べつさぬけれども、そればかり家にいて現在の工場へ入社した。工場内には学校もあるし、茶室、花壇、布草敷と自由自在に遊べる。又労働時間も規則通り八時間——私にとつては毎日が楽しいが、一方各工場を働いてゐる友達はどうしてゐるだらう。時々便りはあるがもう少し自由の時間が欲しいと書いてくる。こすのが常である。

明るく住み良い社会を造るために、又今後中学を卒業して就職される後輩のために労働違反をせひなくして欲しいと切に私は希望する。

ある夜学生の叫び

(文) 店 齋 十八 才

私は以前、ずっと住みなれた広島から原爆直前に田舎に逃げ回りました。父は終戦後の無理がたつてか、私が十二才の時幼い五人の兄妹と弱母を残して世を去りました。でも母はよくしんぼうして、中学だけは通わせてくれましたがそれ以上の学校は望まれそうにもありません。卒業も同進を三月になると、私の向学心は激しい勢いで湧き出てきました。私の周囲の大ぜいの友達が、果しうに進学の話をするにつけ、半々は勝敗を逆戻し手振つて、どんなに苦しくても勉強したいと強く決心しました。それには田舎では身動きできないと思ひ、たつた一人、近い親類とてない広島市に出で来ました。高校の白い大さき校舎、これから始まる学生生活の楽しい夢を描いて、胸は希望にふくらんで来ました。ところが入つて一か月もたない内にそんな少女的甘い夢はかつとんどしまひました。昼間の仕事の疲れは津波のように強い眠りとなって、おしよせて来ます。先生の手も、黒板の字も、すつと遠くにかすんでしまひます。はつと気が付くと先生が私の名を呼んで、なにが質問しているのです。私はおろつと身が重くなりました。周囲の友達がどつと笑い、私をみています。そんな毎日が一月続きました。なんのつてもない私はそれどころか人と知人をたよつて、あるきにならぬ食糧市場の卸屋さんに働くことになりました。もうろく休日は日曜日、一月一回しかありません。朝は五時半から、おつ続けに大きな重荷用の自転車で、配達に行つたり、仕込みに行つたりして、時間一ぱい切られました。僅かな給料で、私は自分がそれだけの能力しかない、悲しくあきらめて、一生懸命切りました。雇主は私の姿をみると、決して用と云いつけなひことはありません。

(つ)

私の学校には向学心にもえて、はるばる地方から出て来たり友達がたくさんあります。みんな、親切な身寄があれば幸いです。朝八時からあふたと出て夜九時頃帰つてくちやつかいものを歓迎し

てくれるはずがありません。松達は食料の料の中から高いへや代を出して自炊しているのです。仕事に疲れたからだと力づけて学校に通い、いつたりとなつて帰宅しても、なに一つ食物の支度もしてない秋風来るへや……つい朝寝坊して、食事もしないで、とび出したまゝのちらかしたへや……つくづくと暖い夕食のどんらんが危しくなつてきます。夜の九時、それからの食事のしにくは私の日課で一番苦になる仕事です。わずかな睡眠時間を減らしても、日常の目にみえない運搬、つくろひ、清掃……私は自分の生活がなんの意義があるのだからかと疑わずにはおれなくなり、松達の最大の楽しみ、日曜日は、一面のこの日をどんなに望んで待つてゐることをいふこと、でしよう。

時間にはおれ、生活にいどみ、勉強する苦学生のみが知るよろこびです。もしも松達夜学生に落ちついた寝床と夕食のしたくの整つた、小さい寄宿舎があつたらなら、どんなにその日の疲労が和らぐこと、でしよう。いいえ、あすへの行動をどんなに力づけてくれるでしよう。この女子学生の夢が実現したならば、松達は大きな時間の節約と健康に、そして松達自身の心の潤いを増すこと、でしよう。松達のこの望みはいつ取り上げられるの、でしよう。私は松達よりもっと若い読者のために、ゆく少年少女のための理解ある御助力を社会の人々に願つてやみません。感じやすい若い松達は、あまりにも早く社会の裏とどのどにめか、一種のひがみや暗い感情もあるかも知れません。でも松達はどきどき、けすかに、明るく、社会の夜いでき事を自分自身にいつしかせ、努力していつつもります。社会の多くの人々は、松達仿さずが少年少女の力強い夢をほぐくみ育て、下さい。

大 望

あの時、中学三年の三学期にしかにもつと勉強出来ると思つていたが………、働き主の居ない家は勉強意欲のある人がいても、それは駄目になるのが当然かも知れない。お母さん、松達字しともいい

のーと問えば、その位の子はお母さんは待つてゐる。安心して今迄どおり勉強して呉れはいいの。こ
の言葉がどんなに松を力づけて呉れたことが、今考えれば單なる母の空想に過ぎなかつたのだ。信用
できなくなつたのは、毎日記してゐる家計帳を盗み見してからである。母親一人で松を養ひ四人の子
供をかゝれた生活が一日どんなにさうりつめても四五十円でやつてゆくやうか、けれど、どうかこうか
生計を立てゝいたのは確ではなくお母さんだ。ノートも鉛筆も通ひ通りとまで行かなかつたか知らな
いが取り揃えて下さつた。何一つ不自由を感じなかつたのはなせだろう。収入と云つてもおぢさんの
款で働く他、他家の手伝、それから扶養がらの小額の扶助、純源四五十円よそでは少くとも一ヶ月は
必ずだと云う時勢に……はうはらと達が類を信つてゐたの方まで下つていつた。こんな大の事の主
治でありながら、食べるだけにやつとなのに、成績がよいからといつて学校へ行けるものか。十五
さん、困らせて呉がつた。御兄はこい学校へ行かなくても一生懸命働けば同じ事です。働きながら勉
強しますじとれがらの松は人が変わった様に思ひに就つたり、無茶に騒ぎ廻つたりして、将来の道を考
えた。必死で考えては一人が微笑、又泣き暮れた。松の腹を知らぬ母は、学校へ行くと勉強が激しい
から今から準備しておきなさいと云つてくれる。その時の気持、泣きささいな様子お母さんの馬鹿
な親を人、松はそんなにしてまで学校へ行きたいとは思つておらんのだに……と怒鳴て見たが
は、けれどそれは余りにも残酷な気がした。だから彼を向いたまゝでうんとと生返事で済ます。胸
がぎゅつ、といつぱりになつて石のように硬くなる肩で大きく息をする。そして両手を力一杯握り
お母さんの胸にもそして自分自身のためににも攣さつ、勉強するんだと心に誓つた。柳田謙十郎先生
の「我が思ひの通歴」等もさばる様に読み続けた。

「……人生に於て絶望と失望の時代極大なる時期はない。こう云う時期を待たないで悼むる男はまこ
とにすらすらと幸福であるが、その為基が弱く少し位の風にもも達うとくらまらにしておれまがりま
たおれる……」そうだ、そうなんだ、もりもりと生命が小れた力が全身に満ちあふれてくるのを感じ

に、こやつてみるのだ。社会の荒波の中で自分のなと戦うのに、人生においてこんなに楽しいことがあるのだらうか。自分の力で好きとして勉強する喜び。こう考へると興奮して踊り出した。つてしまふ。名を求めず地位を求めずひたすら學問と勞働に精進これだ尊敬すべき先生、私も負けないで立ち上ります。私がなぜ勉強しと夢中になるのかと笑う人がいるかも知れないが、大さき全く夢のような希望があるのだ。本心に空想に終るかも知れない。人間らしい人間になるため、私達子供四人を死ぬ程苦勞して育て、下さつたお母さんに御恩返ししたいのです。そうするためにはオ一教養を身につけることです。友達三人に私の力で學問させてやらなくてはならぬ重大な義務もある。二杯の御飯を一ぱいにしても私達を奪り通して下さつたお母さんの人生の後期を安らかに楽しい時にして上げたい。父が居ないのを忘れる位重荷のベールで包んでやろう。そのオ一の彼は私の手の中にあると思ふと腹をかきむしられる様だ思ひだ。現在昼は工場の試験科で前の熱度、弾力性、含水量、各現場の湿度湿度の關係を調べる仕事に従事し、四時四十五分のサイレンを合図に食堂へ一走り、もう私の部屋ではむづかしい数学の問題がかけめぐり御飯は水の如く食道へと流れてしまふ。夢が夢に帰ってくるのが五時五分、作業服とセイラー服と取かえると十五分ばかり、あるところの学校に急ぐのです。五時三十分からの授業に間に合つたことは少いですが、そんなことにはくじけません。教室では時間か飛ぶ様に早く過ぎて、四時間の授業も嘘のように早く終わります。一日のうち最も風樂な時は仕事も終つた。授業も終つた午後九時半、昼の飯れがおし寄せてすわつたが疲れたことすら億劫になり、新聞を手にしていねむりさえてくる。十時半の消燈を過ぎ廊下の光をたよりに一階過ぎ庭水を眺み明日への力を恢復させるのです。

朝六時半から新しい希望に満ちた私の時間がはじまります。

オが大学へ行く様にうつたら小侯となつてお母さんのかわりに尽して上げよう。私が幼く、オは勉強。そのうちは一家兄弟揃つて働くことになりお母さんへの理解の家を建設でさるだらう。もつとも

つと私はさたえなくてはいい、私は毎日夢を述べています。

日記

マシ 紡 織 エ 十 六 才

×月×日 金曜日 やつと一日で最後の仕事であり一番楽しい日記帳を閉くときが来た。今日またいに入浴もお洗濯もできない日。友達と話す時間の少ない日。なぜこんな日ができるのだろう。この答は至極簡單、私は機械ではない。という理由なのだ。洋服から帰って来たのがたしか十時十分が十五分過ぎた。余り好きでないへたな洋服を遠くまで通って留まっているので、かうではくたくたになる。へやに入ってから何をしたともなく、十時半の後習習の作業終了と友達登再習の消燈とを兼ねたサイレンが鳴ってしまった。ごも消燈できない。なぜなら洋服だけ勉強して満足してられない。外にも一社公人として暇がしくない極く低い程度の文学 科学 音楽 数学 英語も勉強せねばならない。勉強を余計なものに考えられてゐる。こゝで勉強するにはやはり余計な時間が必要だ。然しどこにも余計な時間なんてない。人一倍暇な私だが眠る時間を欠く外ない。こんな生活のためにさうも失敗してしまつた。仕事中心かも知主任さんの助てめんびをうけてしまつた。「私は仕事に身が入つてありません」と自ら示したためも同様、それに毎日眠気とたかづめが痛く一杯でよくはんやりしてて忘れ物をする。さうも石けんも受入れ紙票を切るようにと云われていたのに忘れってしまった。働きに来ればずいぶんのは……。もつともつとがん張らなくちやあ。

×月×日 日曜日 今日日は曜日なのに電力の関係で月曜日と休日変更で出勤。相交らずの仕事。羊毛と云う多分月刊雑誌だと返すが、私の仕事である染色から紡績、羊毛の輸出入に至るまで、その道に詳しい人々だろうが私は名前も聞いてない人々によって細々と述べられている雑誌。その染色に關する部分の抜き書きとせよとの主任さんのいいつけ。嫌な事ではないのだけれど、一冊書くのに一ヶ月位かかるのに、五、六冊をためてあるのだから、いつになつたら全部写し終る事だろう。若しこの内容

がわかつたらどんなにおもしろいだろう。文法的に付とがごとか元素記号を入れたものや、梗概にギツシリと元素記号をつめたものなど、化学構式など見ると自分の知識をあらわにけられたようま淋しさと感ずる。私が独力で理解できるのはいつの手だろう。努力、努力、努力すればしつとわかるだろう。

×月×日、火曜日　もう七月、中学の時一番仲良しだった辰さんから二ヶ月以上も手紙が来ない。お正月頃までは二週間に一回、試験などて送がしい日でも月末に一回は必ず手紙の交換をしていたのに、兼書一つくれない。今、家で農業を手伝っている片さんが「こんな事云ったらねえ」と思ひこいて、るやうに聞かせるかもしれないけど、進季した人々が何を目的なのか判らないの、果して勉強するためかどうか。日曜日になると町へブラブラと出かけて、夜は映画でも見て来るのではないか。遅く帰って来て日曜日には眠さうな顔で「きょうも試験なんかいやだなあ」と云いながら家を出て、彷徨っている私達を見ると、冷めた目を向けて行くの。こんなもの見てるとたゞ虚業と云う是處に慰にられてゐるんじゃないかと思われるわ。こう手紙で云っている。

Rさんは高校でなく看護婦養成所へ入つてゐるのだがいつだったか私の所へ来て啼き所「私の所へも遊びに来てね。それから私の所へ来た時あんまり工場の話、しなないね。先生が工場つて云うとどつても嫌がるから」と云つた。今日学が人と坊く者に對してしまつてゐるが中学の時あれ程仲良しだった人からそんな言葉と聞かうとは思へないのだった。うなづいて坊く私達が居るのだから。付さんのいつている様な学生より私達の方がまだ居るのだから。私だつて何も好きでこんなつまらない生活をしてゐるのでは無い。私だつて勉強を仕事にし、勉強を中心のプランも立てた。一日中機械の音の中で汗にまみれて働き、夕食もそこそこで学校に走る。坊く事だつて面白いがこんな生活より昼長勉強できる方がどんなに面白い事だろう。然し私は食事が減りそれがでさまりの。食いのだつて私達がしたのじやない。私達が居るのぢやないはず。それなのに世の人々はなぜ私達を罪人でも見るやうな目で見るのだろう。なぜ工場で坊く私達が居るのだから。放學の繁盛が居るのか？、だつたら少しでも

向上しようと思つては押されておえぬ私運をなせ助けようと思つたのだらう。自護衛を養成する先生、愛と誠に生きる……と講義する先生まで冷たい目で見られなければならぬ程私運工場に訪く人間は悪い人間なのだらうか。

八月六日 月曜日 さようも消燈の事ご免ましくなつてしまつた。十時半には消燈はよこの事。どうやつたら十時半に消燈でさうだらう。兄先生の云うに

「啓利会社で訪さつた勉強しようと思つたのが間違ひである。そんなに勉強したかつたらなせ高校へ行かなかつた？」と責める。又兄さんは「共同生活のつらさはそこにある。自分が何をしたいくとも規則を破ることは許されぬ。又明日の仕事にもごしつかえる」との事。それはわかり過ぎる程わかつてゐるつもり。然し何もプラスのよい毎日を淡々と過ごしてしまつて、現在のようは無知な私が、意志が弱く人に左右されやすい私が、このまゝ成長したら、どうなるだらう。小さな私の頭では考え切れぬ。もし一へや勉強するへや、あすを考慮の上で煙草を紙制限に許すへやがあつたら、さつと消燈を守れるだらう、こゝろ……

こんな生活、こんな考えだけではない。朝の輝かしい光を浴びて仕事に向う時、ついでに、勤労者になつて良かった。と心から喜びがわき出て来る。

登山、俳句会旅行座談会としてつづり方研究会と楽しい行事も沢山ある。しかしそれは唯行事でしかない。私達の日常を保護してくれるものがない。私の笑ひの裏にはいつもこんな影がまつわりついている。この黒い影のある笑ひは一人だけのものだらうか、ゆき子から學ぶ私達年少者はみんな同えている。学ばずに同調の人々の無理解に、お金に、時間に、それなのにバナナコ、競輪競馬に、世界中の不幸と呼び起す矢張に沢山のひととお金が費やされ、私達は時代の激流に流されまいと一本のわらにすがり付いてゐるに等しい姿として居る。決してゆく事は嫌ひではない。失敗してゐる人々に比べて何んて幸福なのだらう。この上に人々の理解があつたら、もっと幸福な私運になれるだらうに。

屈して 立つ

(男) 桶 工 十 七 才

梅雨にたゞかれ、炎天に焼かれて、流色に染色した表わら帽子、そして汗で濡くまつた凡首シャツ、国防色の短く切つた作業ズボン、自転車の荷掛には祖父伝来の道具箱、ズリコを入れるゴザがマシ、その上に自転車輪の輪の様に丸めた桶に掛ける竹輪、これが桶屋二年生のぼくの勇姿です。在家の得意先を廻る時、いつもこの恰好で行きます。自分の家はこのN町の裏の川端に有る。得意先の在家に行くくめには、どうしても、表通りの四つ角を通らねばならぬのだ。このN町の銀座とも云うべきこの四つ角は、朝から、バナンコ店、映画館の飾、感物なジヤズ音楽が通り一ぱいに流れ、朝は通勤者、学生に、この大げこま、バサコ、な恰好で出連い、夕方の帰りは、又、この種の人運と續を合わせねはならない。四つ角、この四つ角こそ、自分の鬼門とする所です。自転車に積んでゐる道具箱から、からんでゐる竹の輪がらがもつてゐる帽子と云い、中学校時代反逆だつた首や、敬わつた先生。わけ、同意だつた女生徒のさつそうとした姿、若さに満ちあつた彼等の胸線に出会う度に、生徒を引かれる愚いで、ベタルに力を入れるのです。その四つ角を、五十米位、南に出ると、視野は、一変して緑の装飾も、又一枚とはえる、教舎、坂川平野が、何の起伏もなく東西に広がっています。この坂川平野に、煙ものんびりと立つ農家こそ、祖父が全生涯を通じて歩き倦んだ得意先です。

(二)

父の戦死の公報は、当時、小学四年の自分と頼に、三人の弟連、母、へ三十一才、祖父へ六十七才、祖母へ六十三才と七人のもとへ終戦の年、二十年にわたつた。一家の支柱を失つた一家七人は、無慈悲にも、荒れ世に放り出されたのだ。どん底に落ちながらも、幸に祖父が営む同工廠はおどいかなる食糧難も、農家を相手取つた仕事なので、米穀、で、七人の口を危くも救つ

てくれたのだ。先体にも屈せず、精神的にも、養生を果す祖父の仕事が、この手先の木工職だったからこそ、どうにかやっていたのだ。母と自分達は、一度もやつた事のない野菜作りを、一丸になつてやり、自分が中学卒業までは、中学卒業まではと、一家七人、寄せて来る荒波を切り抜けてきた。事実自分の中学卒業は、一株の安堵を感じさせたのだ。自分も、からだこそ、まだ小さいが、一家の柱を支え様と、祖父が作ってくれた、才をしっかりと握るのだった。

始めて聞かれた、同窓会の席上で、半数以上学生服の中で、各々の近況、従事している職業等を説明する時など、云いしれぬ恥しこのため、そつと便所に立ち、便所の小さい窓から、美しい夜空を眺めて分辱感一ぱいになるのだった。祖父さえ健全なら、父さえいたなら……と目頭のうろんで来るのを意識するのでした。卒業当時は、学生を見ると、何かしら反響心さえ湧いて来たものが、いつしか学生に憧れを持つようになったのも、一つの心虎の変化でした。そういう日が続くようになった或る日、竹を割りそこなつて、左手の親指を爪もろ矢、深くナノを切りこませたのでした。今まで慣りに慣つていた手首が一時にせきを切つて出ました。傷の痛みも手強い思い切りこの時は泣きました。

今後はむし暑いかからかやをやめ、炊飯り練習をつけて寝ようと、みんな床につきました。手の傷の痛みもあつて、どうしても、眠られず、じつと、ほうたいの手を見つめて、とうとう床の上に起き上り、物思いにかかりました。へと固についたのは一番下の芽の枕もとに「作文」と題した、ノートがあり、取るともなしに、開いて見ると、ぼくの兄さんと題した上に、赤インクで、うすまさがしてあるのを一頁に読通しました。

ぼくの兄さんは、ほんとによい兄さんです。朝はぼくらより早く起きてぐらくなるまで、一生懸命、坊で下さいます。兄のシャツは、やぶけています。ぼくららのシャツが破れたりすると、すぐ買ってきてくれます。兄さんはいつも、こういいます。まあ、あんなもののは、やぶれていてもよい。あんなに、うちに買つてやると、あんなやんが、おなじだ、と、いっています。お父さんがいないので兄さんもごく

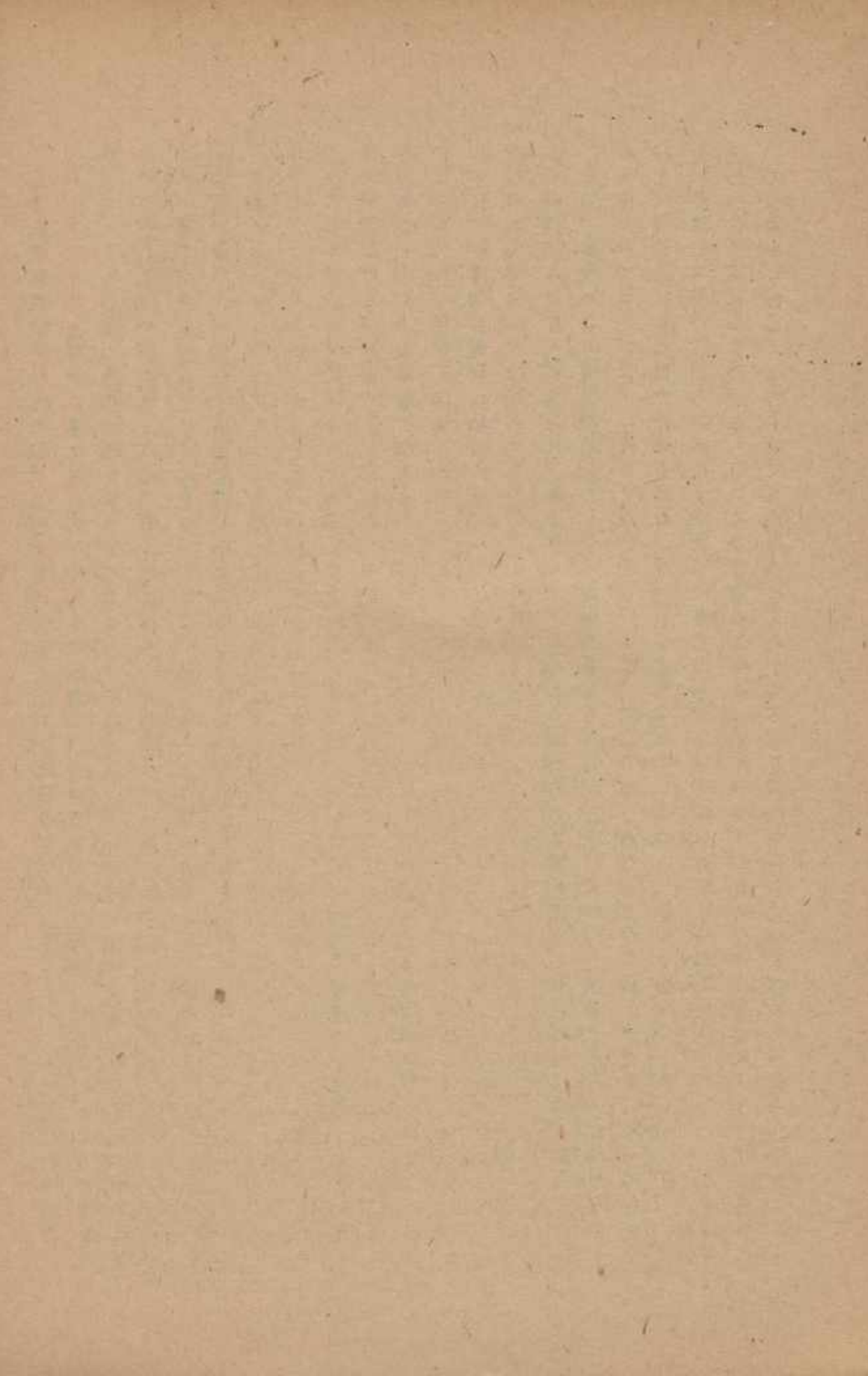
わうです。いつも兄さんのシヤツを見ながら、早くばくも大さんなつて兄さんに新しいシヤツを買つて上げようと返つています——。自分日本の旗に花をついてやりたけしもう助にがられました。もうだオレツて人間はなにを考えていたのだ。オレには三人の牙ダ、ついてゐるのだ。奴等三人は人に負けなゝい三人の牙がいたのだ。そうだが、オレのこの腕で、この体で、しつかりとした土台を築き、その上にすくつと、牙達三人を、立たせるのだ。さうだ、この煙の巻れるまでは、このノコの曲るまでは、旗の安定、牙達三人の強い足場を作るのだ。そのめかつきこそ、三人の牙達にかこまれ、微笑を交す事ができるのだ。——と、十七才にして、は争への倦怠期とでも云うべき、一吸を切り抜けたのだ。以て、おそい来る、あらやる、艱難も、一家七人としかと背負ひ、手い抜くつもりです。——とと共に――

晝
休
み
と
自
由

私は造船所に養成工として入社したが間もなく養成工でなく工員として現場に効くようになった。現場工場という現場は決してうらやまがうたが、私には、始めての工場生活なので、何かにつけてつらいことが多くあつた。

はじめての世の仕事が何をやつてゐるのか。それはどこに行くのあ、何も分らなかつた。しかし私達は常に一生懸命に世の仕事を覚えようと努めた。けれども覚えようとする期には事に興味がなければだめだという觀念が先だつた。「私にはこんな仕事は何がなけり。一生こんなことをするものか。こんなつまらないけれども私達は熱心に仕事を教えてくれる人々に感謝した。やさしく教えるくれる時などは「もつと仕事を覚えよう」という決心がわくのであつた。会社に働く人々は愚つたよりもやさしかつたが、中には特殊な人がゐる。がんで西の人、お高い人、不潔な人、けれども私達をいぢめるに困らせたのは封建性の影がまだ残つてゐることである。

上の人が松達によく物を頼む。パン買って来てくれ、洗濯屋に行つて来てくれ、くつ履に行つてきてくれ、ボマードを買つて来てくれ。そんな時松達は「他に用事があるから」といふことわざで借られる。そしてあらゆる場所で行つてその人に反ばつてくるのである。松はよく煙草を入に物を云う。そのため、つい今人に借られた。借られたが松は冷静に併けていた。松もよく買物に借られた。「パン買って来てくれ、石けんもついでにな、ほら金、これは」とするおに立ち上つたがその歩みの中には何か書目の中に「松の立場も考えればいい」という果たされない希望があった。「はい、パン買つて来てました」といってこし出す時、近頃時などは非常にうれしく、またあんなに借られたら買つて来てやうななどと思つた。登休日は一時間、その一時間をまんじりともせず小間使と召使の中に費してしまふ。休憩時間などは名目のようである。借られるものも一への人だけならよいが二三人から多い時には五人までいろいろな品物が借られる。品物をたれた時、また品物を間違つた時などは怒られて、まだ買ひ求めに行く。皆の下に働くといふことはこんなにつらいものか。けれどもこのような人ばかりではなない。中には非常に親切に松達に向つて話してくれ人もある。「こんなことはやつてはだめ、あの人はおつかない。学校のつもりでいては失敗するよ」といふられる時はほんとうにうれしい。しかし、毎日のように人に怒られ、恥を多く、それでもなほ自分の意見が聞き入れられず、松はこういふ、たいてい、自分のことは自分でしてくれ、自分が遊んでいて人を使ひにやり、借られた人の立場も考えず、あんまりわがまま、だよ、松だとして遊びたい。休憩時間だもの。あんなだつて松だつて知らぬ人商がやないか、自分のことは自分でしてよ、ね、けつして仕事はつらくはない、むしろ遊んでいくくらいだ。しかし、松達は仕事外でつらいのだ。休憩はいい看には分るまい。他人の意見は聞き入れられず、これほどつらいことあるまい、こんなことがなければ会社も楽しいんだがなあ。仕事も覚えようとする気もわいていくんだがなあ。この会社でこの現場にまた一年生は太田分、こんな思いを秘めていふこと、どうう。



斗

二

部

定時制高校に在学する年少労働者の保護対策

福岡県立山口商業高等学校教諭

相 川 秀 記

定時制高校の教師として最も心痛している事は、年少労働者である年少労働者が、職場の無理解によって学業を断念したり日夜重なる仕事と学業という二重負担による過労から健康を害して中途で退学して行ったりすることである。現在中途退学者は入学当時の約五分の一の人数に及んでいるが、その原因の殆どが前述の理由から出ていることと考えると、この面における保護対策は極めて重要であり、将来定時制高校の運命を左右する程の重要な問題であると考えられる。故に早速職場と学校との関係や生徒の健康についての正確な実態を調査し、これにもとづいて必要な対策を樹立する事にした。

一 職場における定時制高校通学についての理解度とその対策

定時制高校が充足して既に五年、今日では別数當時に比較すれば社会や職場の人々の理解は非常に高まって来ている。「オーケー」

この表で分かるように大会社・工場等より中小企業に行く程理解が浅れている。勿論「理解」の内面は生徒の主観的意欲が調査に入っている事は考えられるが、「理解なし」という声もつづ込んで調べて見ると、

「学校へ行くのを上役や友達がねにむし又「仕事の手が足りないの」で学校へ行くのを嫌っている」というようなことがあげられている。

次に「学校と職場との連絡」がどの程度とれているかを調査して見る

第1表 職場の学校に対する理解度

	従業員20名以上 大会社工場等	従業員20名以下 町工場個人商店等
理解ある	52%	43%
理解普通	43%	39%
理解なし	5%	18%

昭和28年4月調査
調査人数 486名

第2表 学校と職場との連絡

	従業員20名以上	従業員20名以下
とれているので都合がよい	35%	10%
とれているが困る事もある	12%	27%
とれてないがあまり支障はない	41%	22%
とれてないため困る事が多い	6%	28%
連絡の必要はない	6%	13%

(昭和28年3月調査)
調査人員 486名

と、上表の如く連絡のとれていないのは僅か一口(10%)以下で、低率で、連絡の不充分は認められておらず、定時制高校の年齢構成も若く、今日では十八才未満の中等卒業生が中心構成がなされている現状なので、これ等年少労働者は年齢の関係上、殆どが本校では新聞社給仕、市役所給仕はよく理解されている。使徒的虎造の個人経営企業下に置かれていた事を併せて考へる時、この方面への対策にこそ重点が置かれなければならないと痛感した。

これらの調査にもとづく対策として、先づ学校と職場との連絡を緊密にし、理解を高めるために「通学承認書」を職場の雇用の責任者に提出して貰い、職場の上役といつても、粗長どが保長といつた直接責任者の理解が生徒達に一番要される。職場が多忙で登校させる事の出来まい時は、学校へ連絡してもらつたように了解が出来た、教師の方も学校の休暇を利用して職場と理解するために「職場訪問」と行う事にした。

ところが生徒の方で「先生の職場訪問」はやめてほしいという声が出たが、一名出たのである。この年少労働生徒は個人商店に勤務しているのであるが、その職場では「大暇は一日に一度もない」という驚くべき労働基準違反の事実が起つていたのである。及ばず労働基準監督署に訴え出るように本人にすすめ、私も使徒者に会つて理解を求めると同時に話し合ふ

機会と持とうとしたが、本人は、

「もしそのよりな事があつて、たとえ私の待遇がよくなつても、使用者の健康を損じればこれからは役にたつてくゝならずし、又もし時にござまれば大変ですから、私は学校を卒業するまでは今のまゝでも結構ですから」。

と真剣に訴えるのである。全く深刻な叫びであるが、全国の勤労学徒の中にはこれと同じ境遇の者も相当多いのではないかと思われる。私は現在本人の適當な職場を探しているが、これが見当り次第早速現在の使用者に面会し理解と反響を求めると共に労基監督署にも相談して見たいと思つてゐる。

大抵以上のような特殊な例を除いては対策は成功し、職場と学校との緊密な連絡は、成り上つて来た定期振興会の母体として発展して行けるようになった。今日では職場の方でも配置転換等をしてくれ、通学に便宜を与えてくれる所も出て来ており、生徒も職場の雰囲気が面白くない時は進んで学校に相談に来て解決して行こうとする気持になつてゐる。

二、保健の現状とその対策

次に年少勤労生徒にとつて大切な問題は健康についてである。盛功きながらしかも疲労をおして夜、学校へ通う際の生活は、過勞と起えに起る人的生活といつても過言でない。

睡眠時間は全員が平均六時間半前後、夕食も時間的には学校より帰宅した午後十時以降が九二%の多數を占めてゐる現状である。調査の結果健康状態は平均三%が現在不調である。(「オ三表」)

この不調者の実情を調べて見ると全員が「体がだるい」とか「疲れて何もしたくない」と明らかに日夜の過勞と訴へてゐる。なお「好調」を除く大半の不調経験者は皆異口同音に、「夜遅く夕食するので胃腸が悪い」と胃腸障害を述べてゐる。

又夜の勉強のため近頃の増加も多く、入学後近頃になつた者は全員の八%に達してゐる。このよ

第3表 健康状態

入学後も好調	40%
始めは不調だが慣れたら感じない	37%
不調であるが心配する程でない	16%
不調で心配である	7%

(調査日 昭和28年3月)
(調査人員 486名)

うな勤務学徒に対してする保健対策として、第一に給食の必要を痛感する。年少にして過重な労働は夕食を確定してとる現状では健康を害さないのが不認識な位である。学校としてもパンの委託販売をやっているが、これでは一時の応急策に過ぎず、是非根本的な対策として給食実施が要望されるのである。現在学校の経費、施設では独自の対策は望まれないが、国家的にもこれを将来是非実現して貰うよう働きかけたのと感づいている。

次に近視に対する対策としては、先づ視度を高める事が必要であるが、高等学校設置標準才二十五歳までは五ワルツクスを下つてはならないと規定され、教室にあっては九ワルツクス以上が要望されていゝのであるが、現状では三五ワルツクス程度である。この程度の設備については、市町の教育委員会、協力を得て、一部には法規通りの限度まで実現できたところもある。今後は早急に全教室にも実現できるものと考へてゐる。次に近視対策の才として教科書の選定であるが、教科書展示会で教科書の選定が行う場合、全日制ともよく結合し、内容を吟味した上で、さう限り殆ど字の大きさは本を採用するよう申入れ、これは昨年から実現されてゐる。但し教科書の点について教科書上の問題もあつて、常に定時に訂合のよい教科書が出でゐるわけはないので、この点については今後研究問題として、将来にも検討、研究が残されてゐる。

次に疲勞を少なくして通学の便をはかるために、生徒の世論調査をもとに、今春四月から週五日制を採用した。このため夏季休暇は三週間短縮される事になるが、然し毎週水曜は休日となるため、疲勞の回復に使となりその手える影響は絶大で、出席率は向上し生徒達からも大いに感謝されてゐる。なおこの週五日制は職場の理解にも役立ち、職場で日頃理

解して貰つて通學してゐる關係上、水曜日の休校日は勤務に精勵でき、又翌日の振替に勤務してゐる者は、この水曜日の休校日を夜勤にまわして貰つて、通學できぬの取扱いが行われてゐる。

三、年少労働者としての學習指導とその対策

定時制高校に等がこれら年少労働者は、比較的家族の経済状態に恵まれない子弟が多い。中には両親のいない者も、両親と別れて孤獨に仕込んでゐる者も多い。ヘバン屋・牛乳配達・果物等に口多いに従つてまづ親身になつて暖い指導を行ふ事が必要である。夜学は關係上教師と接触する時間が少いので、毎週一時間のホームルームで共通の問題を取扱ふと共に、できる限り休みの時を利用して、個人的な悩みや要求を解決してくやらねばならぬ。時に経済的に恵まれず、昼の学校に学べないものであるから、自己努力下に節り易く、悲くなるほど辛屈になる傾向がある。この為には、夜学生友の会を生徒に接触し、一学期に一度は級の親睦会を内いて離れ親睦をはかり、大きくはへ夜学生友の会をつくり、勤労生徒の誇りを持たせると共に、大きく社会に訴へて行こうとして努めてゐる。

學課としては、私自身社会科を担当して居る關係上、昼の生徒と違つて、勤勞の体験と學習に生かして基礎學習に折込むと共に、割個に労働基準法講座をさうやかながら持つて、一箱に勉強してゐる。私も定時制高校の教壇に立つて、勤勞生徒と勉強できる方になつて始めて本當に教育者としての喜びを感じ、自分ながらおこがましい事であるが、こゝで本當の教育ができるのではなうかと思つてゐる。教育組合としては、現在こうした年少労働者を生徒として教育してゐる定時制高校への対策はまだ、不徹底で、組合内部に對しても、もっと認識を高めて行かねばならないと思つてゐる。

以上、年少労働者に教師として接する立場から實際して來たことについて、保護対策の必要性和具體的な対策を記述して見た。欲力にして實際記録として發表できるほどのものではないが、これと機會に自己の体験を反省し、もっとみんなと協力し、年少労働者教育の在り方をすこしでも

確立して行くようにしたいと念願してゐる。

年少者の教育訓練の事情

日本光学工業株式会社

技能者養成所主事

井 上

敬業

まえがき

労働条件の改善向上は、労働者のみならず企業自体の発展性と関連した戦後の重要問題の一つである。

我が国は政治・経済・産業等において国際性を充分に考慮しなければ最早成立にない状況にあることは明らかである。産業を立国の基幹条件とする限り、生産技術や設備の近代化の促進と共に、労働条件の国際水準化が当然の重要施策となり、産業に与えられべき重要課題である。然しながら労働条件の改善向上は国民生活と成立にせむという大前提の下に、その一要素として段階的に進められねばならぬと考えられ、又何れの面に重点を置くかは産業の状況と歩調を合せる事が大切であると思われる。

更に云えば過度の労働保護は、必ずしも労働者を育成し、生産性を増加し、同時に産業を振興することにはならぬということも合せて考えられるからである。

労働条件の改善という問題では我が国では女子と年少者が先づ何れの場合でも採上げられ、女子と年少者に對しては特に封建制打破を前提として徹底的に労働保護という面が強調される事も当然と考えられる。猶ほは女子一般には缺けないうが、年少者が産業労働に多数従事し、生産に相当大きく寄

ましていふ事實から見ても、切く青少年に何等かの形で國家の負担に起るだけの教育を予へ、一人前の成人となるべき教育を施す方途を察見しなければならぬ。

そこで先ず考えられたのが労働保護と職業教育の調和であり、これを両立させる方法であつて、それが現在の労働基準法内における技能者養成制度である。然しこの兩者はそれぞれが異つた本質と発展性を持つてゐる。特に概念的には兩者の調和の形において、その発展が考えられるが、これが労働関係と生活と生産という現実の動きの中において、むしろ調和する部分よりは相反する内應の方がより多く現われて、その発展を妨げるようになる。例へば保護という監督的側面と教育という助長的側面が行政の中でも方法的に食違つてくる。それは兩者の調和そのものが本質的要素でなく、むしろ大々前提とも言ふべき自立生産の達成とが國力の増進とかいふ國家施策から割出して、保護は保護、教育は教育としての方策が進めらるべきであらう。

就中我々が年少労働者の技能問題を取扱ふ場合にこの予備と障害に當面して困難する場合が多い。技能者の養成は、企業の基本内題の一つであり、労働者の生産性の根元であると同時に國家の生産自立とつながる問題であることと強調したい。

当社の現状では直接作業員数一、二五三名（男子一〇三五、女子二一八）に對して年少者は二五九名（男子一八九、女子一七〇）に當る。現在技能者養成を行つてゐるのは男子二二三名で一八名、内年少者は一八名（十ハオ以上に上つた者が二十五名含まれてゐる）で一六名弱であるから、生産における比重及び技術水準中に占める役割も甚だ大きいと言わねばならぬ。

二 技能者養成実施の理由と年少者の特質

先導工業という企業では他産業からの熟練工の補充が極めて困難であるために、どうしても社内教育訓練が要請されるし、その上精密高度の技術水準を維持向上するには、相当長期間の教育訓練を行つて後継者を育成しなければならぬのであつて、当社が多年に亘つて行つた至終と（昭和五年青年

訓練所開設以來、昭和二十五年青年学校の廢止による廢校まで継続、昭和二十六年四月基幹法による養成所再開の効果から見ても、合理的系統的に理論と實習をマツケさせた技能者養成の形態が技能習得には最も適合しているので、この方法を採用しているのである。

しかも教育訓練と行うには級教育者の姿をよく理解することが非常に大切であり、これなくしては教育訓練の効果は期待し得ないので、こゝに年少者の持つ特質と、身体的、精神的、又は入社前に受けた教育その他の面から考察して述べることにしたい。

1. 身体的特質

文部省の学校衛生統計（昭和二十六年）によつて生徒の身体状況を觀察すると、身長・体重共に男子十二歳、女子十一歳頃から急速な發育を示し、男子十五歳、女子十三歳頃が最もめぐましく、男子二十一歳、女子十八歳、女子十八歳頃で略々その發育を完了し、以後著しい変化はなくなり、略々その年齢を以て成熟するものといえる。こゝに身体の發育上、十二歳、十五歳及び十五歳十八歳頃が最も大切な時期ということがでさる。

しかも戦前の調査によれば年少者が労働に従事した彼等の体位が生徒のそれと相當の差ありし事実から、幼く年少者の体位の向上が、産業交通への一大要素であることを窺ふ時、この問題にも重大な関心を寄せる必要に迫られる。

労働基準法が最低年齢を規定した今日、果して幼く年少者はどのような体位の変化を示していることだろうか。

2. 精神的特質

桐原博士は日本人の精神的階級能の発達について一二〇〇〇人に実施した智能検査の結果を報告し、智能の年齢的發達の様相は「女子は六・七歳、男子は六・十歳の間にそれぞれ大なる發達を遂げ、更にその後四か年間は長大な發達を示し、その後更に發達を続けて女子十七歳、男子十八歳を

以てほど丁年に達する。この事は運動能の発達においても同様である」と述べられ、この発達の時機から発達時期を区切つて、女子六く九才、男子六く十歳を少年期、女子九く十三歳、男子十く十四歳を青春前期、女子十七歳、男子十八歳までを青春期と名づけ、特に男女十四く十五歳頃が青春期発達の中央に位する重大時期だとしている。

尚青春期に於ける精神的諸機能の発達の姿を在学者と就業者とを比較すると前者は引続き長足の進歩を遂げているのに対して、就業者は進歩の跡が顕著でなく、この事は推理洞察等の知能の本質的な働きでは殊に甚だしく、又女子は男子よりも一層この傾向が著しく現われると報じている。徒弟制度の弊害から年少労働者を救ひ、合理的系統的な教習を行う技能者養成の制度は、幼く年少者の必身をどれほど伸張させることが出来るだろうか。

3 年少者の入社前に受けた教育と環境

新教育制度は昭和二十二年から実施されたが、やゝ戦前に来るようになったのは果して何年頃と言えるだろうか。戦前の混乱と恐慌とインフレーション、この新制度の学校ととり巻く環境であった。この環境下に万端なく混乱と眞鍮な教育が行えなかつたのは当然と言えよう。

しかも東京という大都市に生れ、成長して入社する年少者のこの数年間の実態は、その大割合が学童疎開によつて基礎学力の低下している者たちであり、戦争と戦災により両親又はその一方を失つた者、或は何等かの影響を受けている者がその大割合を占めていることである。

しかし新教育制度の過渡期は一応通りすぎ、経済の安定に伴う民生の安定と共に教師・設備・教育内容その他の面にも着々向上進歩の跡が見られ、教育の効果が漸次現われていることは毎年の採用試験及び採用後の各種の調査や考査によつて知ることが出来る。

三 教育訓練の実態

「ニ」に述べたような年少者の時分から、心身共に養育旺盛なこの時期に適切な教育訓練を行うこ

とは知識、技能その他の何と最も効果的に向上させる最良の策と云えよう。以下当社の実態を示すこととする。

1. 教育訓練の目標設定

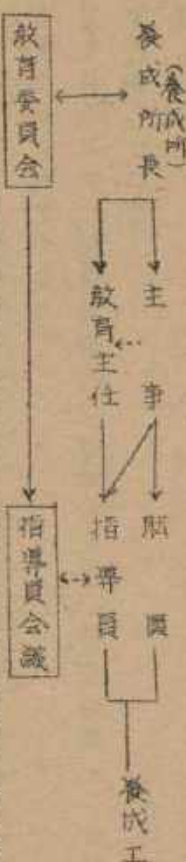
教育訓練計画の樹立に當つては教育訓練の目標を明確に定めることが極めて大切である。技能者の養成が教育の知識、技能を向上させて将来会社の基幹従業員としての素地を育成することにあるのは勿論であり、当社においてはこの目標の策定は「教育委員会」が行うこととなる。

即ち教育委員会は養成所長の諮問に答える機関であり、その任務は教育訓練方針及びその大綱又は養成上主要なる事項を協議するのであり、重役四、部長二、副長大、養成所主事及び労組代表で構成されている。

教育委員中労組代表が参加している事は当社の専長で、これは労組の協力が養成の効果と大きくし、労組の幹部には技能の指導監督者が多いからである。

2. 教育訓練の組織

技能者養成の円滑な運営と効果をねらつて、左のような教育訓練組織を構っている。



技能者養成所は総務部内に課と並列して設けられ、総務取締役兼総務部長が所長を兼ねている。教育主任は技能者養成規程第十八条による指導員資格取得者の中から会社が任命し、当該組織の教育訓練の責任者となり、部長又は副部長がこれに當っている。

指導員中特に実技指導員は直接養成工に接する機会が最も多く、養成の効果を左右すると言つても過言でない。その設備には指導員としての適格條件を備え、指導員の中から現場の副長・部長の推薦によつて会社が任命している。実技指導員は現場作業の基幹をなし、その推進力看たつて、大抵分ががつての当社の養成機関の終了者であるから、現場養成工との間には先輩・後進としての強い労働員がもし出されている。

尚教育委員会と共に指導員会議は週時間かれ、主務指導上、教習方法上の討議研究等を行つて補導の万全を期している。

3. 教 習

教習は慎重な計画や周到な準備、年少者の能力等と考へて、合理的系統的に進められる。養成三年の教習総時間数は約六五〇〇時間であり、その中実技五三〇〇時間、学料約一二〇〇時間である。これを高等学校へ八十五単位以上取得した生徒三〇〇〇時間と比較した場合には総時間では二倍強、学料では四〇％を行ふことになる。以下これを学料、実技、体育等の面から見る。

4. 学 料 教 習

学料教習は労務法令による教習基準と当社の特項を考慮して基本を定め、一年次一週十二時間、二年次、三年次には一週当りそれぞれ八時間、四時間を課している。これを工業高等学校と比較すれば、専門学校では五〇・一五五に当り、しかも企業の実際に即して直ちに役立つ、或は将来是非共必要とされる生きた教育が行われていると云える。

しかしこゝで問題になるのは漸次向上しているとは言え、新入年少者の数学の学力低下は否定し得ないことである。特に数学・物理・化学等理数科系統を絶対に必要とする当社では、より一層、この感度を深くするのかも知れないが、本年四月採用者の数学・国語・社会の平均がそれぞれ五四・一六七・七、七四・四となつていふのを見て知る事ができる。

そのために直ちに専門学科教習が出来兼ねるので、数か月間は基礎学科の復習を行わざるを得ない事は誠に遺憾である。

しかし指導員の熟練と養成工の自覚と努力は略々所期の目的を達成しつつあると言える。更に機械の操作でも技能の熟練でもつまりは人物によるので、戦時時に道義の旗幟が叫ばれる折柄、精神教育面の指導には慎重を期している。

ロ 実 状 教 習

学科教習を除く時間はすべて養成期間終了まで技能習得の爲の教習である。養成工ニ二三名に對し四〇名の実技指導員を配して居り、これは養成工五、六人に対して一人の割合である。

実技の指導に當つては会社の定めた教習基準により一年次は専任指導員が二、三年次は専任又は部長以上の兼任指導員がこれに當つて居る。

一年次は主に基本実習と、二、三年次からは基本・応用両実習を併用し、養成終了までには概略その振種の作業内容と関係知識を習得し終るように実施して居り、二年終了時では振種によつて多少の相違はあるが、標準作業量の五〇〜六〇％の實力を持つようになる。

こゝにも計画的系統的に技能と学科をマツナせしむ技能者養成の方法が彼等の特質と適合してよい結果を示していると云へる。

その効果の二、三の例を示すと次の通りである。

- ① 技能修得期間が短縮される。
- ② 熟練を早くし、機械器具等の取扱が丁寧になる。
- ③ 疑問の解明に努め科学的に物事と処理するようになる。
- ④ 職場内に教育の関心が高まり職場規律が改善される。

体育教育の目標は身体發育の激盛期にある該等の健康を維持し、進んで心身の健全な発達を促し、日常の作業或は作業環境の影響による時形的発達や疾病、危害から護ると共に疲勞の回復を促し、更に進んでは労働に適するような体力並びに明瞭敏捷な精神を育成するよう心がけている。定められた体育時間には柔軟体操又はバレエ・バスケット等の全身運動に重点を置き、併せてスポーツマンシップ・チームワーク等の精神的要素の培養に努めると共に余暇時間には特に運動を奨励している。

当社は養成工（一六九名）の身体測定の一割を、文部省の学校衛生統計（昭和二十六年度）と比較して見れば次表の通りである。

身長	種別	
	生徒	平均
養成工平均	一五六・二	一五六・六
満十五才	一五六・二	一五六・六
満十六才	一五九・八	一五九・七

体重	種別	
	生徒	平均
養成工平均	四七・四	四七・四
満十五才	四七・四	四七・四
満十六才	五〇・七	五〇・七

なおこれを生徒平均を基準として比較した場合、当社は養成工は次表のように身長及び体重に劣るが、体重、胸圍は多少劣るので、その發育を促すための体育指導に努めなければならない。

身長		体重	
平均以下	平均以上	平均以下	平均以上
五三・三%	四七・七%	三三・二%	六六・三%
平均以下	平均以上	平均以下	平均以上
三三・二%	六六・三%	三三・二%	六六・三%
平均以下	平均以上	平均以下	平均以上
三三・二%	六六・三%	三三・二%	六六・三%

現下の社会状況や社内事情又年少者の家庭にも含めた諸環境と彼等の時限を考慮した場合、彼等の日常生活に必要な指導即ち社内外の生活指導にも譲けり手とさしおける事が必要であると考えるので、当社が実施中の生活指導とリクリエーションの実践について主要なものの幾つかを記することとする。

1 父兄懇談会

会社・父兄間の緊密な連絡が相互間の理解と関心を深め、年少者の教育訓練と効果的にするので父兄懇談会を行つてゐる。

その方法としては社長又は常務取締役の父兄に対する挨拶、当該養成工の実習場を重点とした社内見学及び実技指導員との懇談、その次主たる教育関係者と父兄間の懇談を行うのである。例年父兄の出席率は極めてよく、この結果から相互間の理解が深まり、父兄の協力的態度が増すと共に、養成工の教育に対する熱意努力が顕著になつて所期の目的を達する爲に多大の收穫とあげることが出来る。

2 生活日記の記載

日々の生活と反省し、よりよい明日の建設をはかるために日記をつけることは、一般の者にとつても必要であるが、特に年少者の教育訓練には、彼等の知識・技能の習得上、又産業人としての人格培養上からも極めて肝要である。

日記記載の方法は、その日の学料、実技練習上の要点と感想に別れてゐるが、これを継続して行くと、資料練習の復習となり、実技面では作業上の要領の記入や要点と記すことによつて、要領に付する能力を高めると共に失敗誤違等を繰返さるゝようになる。又作業環境、対人関係、家庭事情その他の感想中からは、指導上に必要な数多くの事項を察見する利点がある。

3 養成工自覚会

青年は青年の特質から何か自分等としてしようとすつ志趣に燃えているものであるが、彼等の鋭意によつて出来たのが養成工自治会である。自治会は養成工全員で構成されて居り、会員相互の親睦と人格の向上又養成所の発展を目的としている。この目的を達成する為に図書部、文化部、体育部等があつて、機関紙「はぐろ」の発行、多環技の養成工大会等が行われ、活発に動いて居り、彼等の親睦と自治能力の向上に役立つ面が大きい。

これらの活動に対して会社は図書や運動具の購入等各般に亘る援助を行っているが、特に彼等が正當な心身の養育を遂げるよう留意している。

4. 他社見学の実施

産業人としての資質を高める爲に各種工業の実態を見学して参考とし、見聞を広めることは大切であるが、次の如く実施している。

即ち工場設備とか種々の管理面にも大体の知識を持つようにならる三年次生に教科課程の一環として、精密機械工業・重工業・装置工業関係等の各種工場を対象として、見学せしめている。見学実施の結果から見れば、彼等は彼等なりに非常に鋭い観察を行うものであることが見学時の質問又はその後の感想文の提出等によつて伺われるのである。見学と批判、観察と反省の中から彼等が何物かと得るであろうことを確信している。

5. 夏季鍛錬会

現在の学校教育で最も欠けている一面は集団訓練、規律訓練等にやゝ消極的であるといふことはなからうか。

社会生活に社内生活は勿論、社外でもこの様な訓練は必要であると考へる。この爲に集団の一員としてのリーダーとしての立場、又は協調・協力・服従等の精神的要素の涵養と、体操・水泳等による身体鍛錬の目的と兼ね合せて行うのが夏季鍛錬会である。

夏季休暇中は会社の厚生施設を利用しての計画的養育訓練で一面では心身の鍛練であるが、又他の面ではリクリエーションのよい機会でもある。この機会に人間として最も赤裸々な姿を示す時であり、又指導員と養成工、養成工相互間の意思の疎通を図る上では好適のもので、親密感の増大と協力体制の確立の爲に、或は養成工の個性を知って個別指導を行う上にも亦たない機会である。

6. 厚生施設とリクリエーション

光學工業のような頭脳労働で、しかも高度の熟練を必要とする精密工業、更に生産環境が東京という強烈な利権の中にある関係から、当社は古くからリクリエーション施設には深い関心を寄せている。

文化教養娯樂施設、運動（体育）施設は申すまでもないが、この他に当社特設の施設としてデント付へ海の家で鎌倉にあり二つの名宿泊次事可、光小屋へ山の家で奥多摩にあり一五〇名宿泊次事可がある。このような施設は心身の疲勞を癒やし、大自然の恩恵の中でリクリエートして、労働の生産性を高める爲に非常に大きな役割を果たしている。養成工に対してこれらの施設の利用によるリクリエーションは全面的に奨励している。

五、むすび

以上年少者に対する教育訓練の實際を記したのであるが、彼等は会社の行う養成について、或は彼等自身の身分や待遇についてどんな考えを持っているのだろうか。この内心の声については資料を査や技能検定からは測定がやゝ困難である。しかも彼等の動向については会社としても教育訓練の当事者としても是非未知ならぬ問題点である。

こゝに所謂態度調査の必要性があり、この調査の結果から検討し、実施せねばならない教育訓練上の重要事項を知ることが出来る。

毎日養成所が行つた態度調査は、仕事に対する興味や誇り、仕事の専断等作業上の問題点七項目

養成所に対する信託、燃料・食料等教習上の問題点三項目、資金に關して三項目、將來性二項目、職場環境、対人関係等四項目、日常活動に關して六項目、その他計二十七項目、その他計二十七項目、そのうち、(1)普通、(2)活発的として測定できるように作つて調査した。この結果から全項目に對して(1)五二%、(2)三五・三%、(3)一・七%を示したため、調査面に現れた共通問題の引上げを重点として採上げると共に、個々の問題点については、その原因の究明と指導にぬかりないことを期している。

一方当社養成工で高校又は高工校の定時制に通學中の者は総員の約四〇%であるが、彼等は養成の笑情を知るに隨つて次第に減少の傾向を辿つてゐる。嗣つて一般年少労働者の教育を考えた時、日本の再興自立が産業の興隆によるとの観点からも、又彼等の保護や育成の見地からも一日もゆるがせに出来ない重要問題であるのに、國家の政策でも又一般企業でも、この問題が速効的反應の少ないのと多大の経費を必要とする関係から、直ちに実行に移せないのは一応止むを得ないことではあるが、國家の今日と將來を思えば重やかにその具体化を望んでやまないものである。

尚一般社には高校通學が普通教育と考へられてゐる現任、戦後社会状況の急変もあつて家庭的至清的に思はれたい多くの年少労働者が、向學心に燃えて夜間定時制を選ぶのは必然と言つてよく、たとえそれが彼等の自由意志であるとはいへ、勤務と通學による精神的肉体的労力は一日夜に十数時間にも及び、更にこれが四十年に亘る過重負担となつてゐる現実には、結果的には切角の法の精神も無駄になる恐れがあり、しかも社会は彼等を簡単に「思はれない運命の者」として見逃すとしたら、それこそ余りにも過酷な取扱ひといえよう。

そこでこの対策としては、眞の技能者は青年期に於けるよい教育訓練から必ず生れるとの學問的理論又は経験から見て、國家の助長助成等によつて、各企業体に養成教育の普遍化を図る一方、彼等に對しては適切な社会的格付を行い、又現行定時制との関連性を特にせると共に、社会一般に對しては從來の偏見を是正させる等の方法と稱じて、技能者養成を強力に推進することが目下の急務である。

と考えられる。これこそが産業を振興して自立を達成する道に過ぎ、年少者の保護と育成にも共に通ずる根本策ではなからうか。当社では夙にこの問題に着目して種々その実効を擧げているが、今後とも一層研究改良を重ねて眞に年少者の保護育成に衝全を期したいと努力を続けている。

中小企業と年少労働者の保護対策

橋本繁佐野市

佐野被服工業株式会社総務

関 報 国 二

年少労働者の保護育成が近代のすぐれた労働者を作り、企業発展に欠くことのできない一要素であることは自明のことであるが、この対策実施は中小企業では最も困難な問題である。この問題の成功こそ企業発展する原動力であることと、私は労働管理担当者一人として、つねに自認しながら、毎日苦勞している。年少労働者に対する労働管理として私の考えていること、実施していることの一節を述べて諸賢の御批判とご教示を願ひしむと思ふ。

年少労働者の保護対策の第一歩は学童を出て社会人として働くために完全な就職をすることにある。就職することは単に転職について職場で働くことではなく、就職者の能力に適應した職業に就き、またその職場の労働管理がゆき届いてはいなくはならない。適正な労働管理の実施によつて、年少労働者としての保護育成が出来、働きながら職業人としての技能と社会人としての敬愛人格を身につけ、将来有望な人材と成り得るのである。まず、雇入れのときからの方々から、当社では雇入れについて公共職業安定所を経、学校の職業科担当教習と連絡相談し、教官を通じて就職希望者の個人的能力、家庭における状況を知り、又就職希望者は雇入れの状況、労働条件、作業環境等について認識してもらひ

とに重点を置き、又職業選択の参考に職場の概要を学校側にすゝめていた。

採用選考は「就職」についての質問票に就職を希望した理由、家庭の状況、日常生活における飲食・娯楽・運動面等の状況、健康状態、就職についての意見、希望等を記入させ、これにもとづいて個々面接とし、採否を決定する。採用者は予備教育として入社前に顔合せの集会を開催し、この際特に公共職業安定所係員、出身校職業科担当教官の出席を願って就職に対する激励をしようとした。この際から、入社後の一般注意、就業規則、安全と衛生、職場と家庭との関係等について説明懇談したり、職場の見学とさせたりして、入社後に対する希望と喚起する。入社日にはごきう兄弟同道で本社してもらい、父兄との懇談会を開き、会社の状況、作業の内容、職場の環境について説明し、又安全と衛生、社会保険、労務に対する保護対策等に家庭の協力が最も必要であることを強調し、職場を參觀してもらい、家庭人に安心感と積極的な協力を促している。以上は在入社から入社までの実施状況であるが、就職に対する理解は将来のある年少労働者を不幸に導くものであって、雇用主は勿論、公共職業安定所、学校、家族の人々の就職に対する真摯な関心と検討こそ必要である。

次に進学希望をもち、充分その資格をもちながら家庭の事情その他で止むを得ず就職する者には定時制就学に便宜を与える事を当社の方針とし、現在定時制高校夜学に男子二名、女子一名が通学しているが、みな勤労のかたわら勉学に一生懸命いそしんでいる。

是の労働条件が年少労働者に及ぼす影響が大さうことは明かである。労働時間・休憩時間・休日及び賃金については労働基準法の規定に基くことは勿論であるが、大企業の職場では守られても中、小企業の職場ではなかなか至難の場合もあり、指導監督の行政面においても同じようなことが云いうるようである。一般に従業員三十名前後、又は以下の職場に対してはもとつと関心を持つ必要があり、さらに研究を要する問題である。当社では、就業時間は始業午前八時、終業午後五時、休憩時間は午前十時から十分間、正午から四十分間、午後三時から十分間、休日は休曜日（月曜日）をめて、週休としている。賃金

は日給制（工賃）月給制（販賣）とし、毎月二十日締切で計算し、毎月二十五日支払としてゐる。

福利厚生方面で大事なこととは社会保険、健康保険、厚生年金保険、失業保険、労務災害補償保険）に加入することである。災害・疾病の際に経済的に保護される事こそ防く者が安心して生産に従事し得る條件であることと考える時、社会保険完全加入の実施は、年少労務者を使用している中小企業の販賣では大いに関心を所すべき問題だと思う。この点、当社は前記にがつたところなるべく早く保険医の治療を受け、早期治療することとするので、欠勤防止にも役立つ。また治療のため休んだ期間中は傷病手当金の給付によつて、休んだ日の賃金の補ひも出来るので、みな社会保険のお蔭を喜んでゐる。特に入院又は手術のため多額の費用のかゝるような場合には、医療まごが保険診療の負担を減らし、みじめ感じてゐる状態である。社会保険制度の関心が要望されてゐる現在、各関係者がもっと進進に力を入れるべきではないかと思う。

次に運動・娯楽・余暇利用などに対する対策も大切である。運動競技を通じて相互の協同精神、敢闘精神を養ひ、また健全な娯楽によつて労務にふる疲労を回復する一助ともなり、教養・人格の修養を積むことも出来る。

当社では労務組合は未組織であるが、これにかわる協和会が従業員によつて結成されており、逆巻によつて選出された評議員・役員によつて構成され、音楽・圖書・演劇・体育・厚生生活の五部よりなる文化部によつて、それぞれ自主的な方法で福利厚生面を補つてゐる。例とあげれば体育部による野球（男子・女子）（男女）、圖書部にふる月刊雑誌、単行本の回覧、貸出し、音楽部によるレコードの音楽観賞等である。女子卓球は工場内競技で数回優勝もしてゐる。尚会社主催により勤労慰安の目的で、春秋二回温泉地一泊旅行会を催し、大いに効果を奏すると共に、この際に分限一休みの協力、職場全体の和と生産増進・産業発展に大切であることと互に理解するよう指導してゐる。旅行会の慰安会には、協和会の課

労働者主唱による年中行事四月の輸入通商、七月の全国安全通商、十月の労働衛生通商、十一月の年少者の保護運動等の行事に協力し、この期間を大いに活用して労働者の向上、安全、保護対策の促進をはかることも中小企業の職場にはやゝ不徹底めさういがある、前月五来な行事を行つていても無関心な労働者へ年少労働者はなおさらである、これが相当あるのだ、よほどは主唱者による不エター標榜募集による啓蒙のほか、適當なプリントを作り行事を活用している。

以上食糧の意見と当社実施の一端と述べたが、如何により対策もより指導者、監督者と得なければ効果はない。従つてより監督者の養成と訓練が必要である。当社は監督者訓練のためT.W.I.方式を採り入れ、現在二名にその方式による仕事の教え方の十時間講習を実施中である。

次代を荷う年少者たちの行動には戦後の社会的影響とは云いながら、正視に耐えられないものがある。職業に対する技能ばかりでなく、もつとしつかりしに教育のある人間に作り上げてやらなければならぬのである。年少者として悪い保護を加えることは勿論であるが、これにそれと義務の裏付けのよい批判のみと主張これでもこまりものである。社会一般として、又指導監督官庁・雇主・学校教官・家庭人は年少者の保護対策について関心を待ち、研究する必要がある。

当社は縫製業で、主な製造品は男子既製洋服、背広服、学生服、オーバー・ズボン、ジャンパー等である。現任従業員八十五名、内男子十一名、女子七十四名、このうち年少労働者三十四名、内男子一名女子三十三名である。私が年少労働者の指導に関心を持つ所以は、作業が工業用動力ミシンを使用し縫製する手工業で、何れも技能が必要であること、作業に技術指導が特に必要であること、この二点が、新制中学校卒業者のみを対象として、ある昭和二十二年以来採用し、正しい技能を身につけてやり切さながら立派な社会人として、自立する人をつくり、世に送り出したい念願からである。

過去を省りみて、学卒者のみを採用して指導し、職場内の雰囲気と明朗にした効果もあらわれているが、又数々の困難な事情もあつた事を思い、あわせて国家の将来のためにも同一層年少労働者の益々何

上せらるゝことと違ふと共に、重ねて年少方切有の保護指導に關係せられる諸氏の御援助と御指導を切
にお願ひするものがある。

